まちカドまぞくRTA番外
メイプル旅行記

兼六園

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二次創作の二次創作な三次創作はーじまーるよー。本作は『まちカドまぞくＲＴＡ』、『がっこうぐらしＲＴＡ』、『ステラのまほう実況』を読んでいないとわからないキャラクターが登場します。

アプリの方は第一部クリア済み、第二部更新分クリア済み、単行本も１～３巻を所持しております。

まちカドまぞくＲＴＡ

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２０９９６９／

がっこうぐらし！ＲＴＡ
ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２２８１４２／
ステラのまほう実況
ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２５３３０５／

目次

榎並清瀬 ① 1
榎並清瀬 ② 15
榎並清瀬 ③ 25
十倉栄依子 ① 38
十倉栄依子 ② 51
十倉栄依子 ③ 62
セサミ ① 72
セサミ ② 84
リアリスト ① 93
猿渡宇希 ① 105

榎並清瀬　①

——豊かな自然に満ちた世界『エトワリア』にて、『言の葉の樹の神殿』の女神ソラが観測する世界を物語として記した本——『聖典』

そんな聖典の一つ、『まちカドまぞく』からほんの少し——僅かにズレた世界から召喚された青年、秋野（あきの）　楓（かえで）。

どういうわけか召喚されてしまった彼は、自分の知り合いが召喚されるのを待ちながら、同じく一人だけで召喚されてしまった同族（クリエメイト）と、里の一軒家をルームシェアすることとなっていた。

——小鳥のさえずりが聞こえてくる朝、楓は同居人が目覚める前に朝食を作っていた。

「……よっ、と」

フライパンの中身を皿に移して、二人分の料理を用意すると、エプロンを脱いで畳んで椅子に引っ掻ける。それからキッチンを移動して、自室の隣にある同居人の寝室の扉

に近づいた。
「榎並(えなみ)さーん、朝ですよー」
ノックを数回、しかし反応が無い。楓はまたかと小さく呟くと、遠慮ぎみに扉を開ける。
中のカーテンは閉めきられ、部屋の隅に置かれたベッドの上には、布団を首元まで被り穏やかで静かな寝息を立てている女性が居た。
「榎並さん、そろそろ起きて朝食を取らないと、学園に向かう時間に追われますよ」
布団の上から肩を揺すると、女性は遅れて身動ぎして意識を覚醒する。楓と同じ黒髪は短く揃えられているが、その頭も枕に埋もれていた。
「……うぅ、ん」
「榎並さん、起きてください」
「……起きてる」
「はい、おはようございます」
寝ぼけ眼の女性が、ベッドに寝転がりながら楓を見上げる。そんな楓も、女性の顔を見て微笑を浮かべると、起きたのを確認して部屋から出ようと踵を返す。
「朝食が冷めますから、早く顔を洗って、リビングに来てくださいね」
「……ああ」

寝癖で跳ねた髪を揺らして、女性――榎並清瀬（きよせ）は浴室の洗面台に向かう。
それを見送った楓は、キッチンの料理をテーブルに運んで清瀬を待つ。数分して戻ってきた清瀬は、楓の向かいに座るとまだ眠気の残った声で「いただきます」と呟いた。
「今日は里の学園の授業に参加するんでしたよね。お帰りは夕方ですか？」
「ああ。……まったく、エトワリア（こんなところ）に来てまで教師をやらされるとはな」
「大変ですね」
心の底から労うように返ながらも、ホカホカと湯気の立つパンケーキとベーコンエッグをナイフとフォークで食べ進める。
「……旨いな」
「――それはよかった」
にこりと微笑む楓を見て、清瀬は視線を逸らす。それから食べ終えて皿を流しに置くと、時間が来て席を立った彼女が、食後のコーヒーを飲み干して楓に言う。
「そろそろ出る」
「はい。あっ、そうだった……これお弁当です、前の容器は小さいと言っていたので、一回り大きい奴を買いました。今日はサンドイッチを作ったのでお昼に食べてください」
「……ああ。いつも悪いな」
「いえいえ、好きでやってるので」

蓋をした弁当箱を渡した楓にそう言われて、清瀬はそのまま見送られる。
「さて……洗濯、皿洗い、掃除……晩飯の買い物……今日は寒いし温かい料理にして――」
残った楓は指を折り畳みながらタスクを確認する。そんな自分を客観的に見ると。
「……なんか専業主婦みたいだな」
そう呟いて、首を傾げた。

「なんというか、お母さんって感じですね」
「ですよねえ」
買い物用のカゴをエコバッグのように手に持つ楓は、朗らかに笑みを浮かべる少女と里の一角で会話を交わしていた。明るい髪を揺らし、マントを身につけた少女――召喚師・きららは、楓と歩きながら会話を続ける。
「それにしても、榎並さんと楓さんは、一人だけで召喚されたんでしたよね」
「そうだねえ。しかも男のクリエメイトって珍しいんだっけ？　ああでも、俺以外に燎原と古木さんとひでりちゃんが居るからなあ」
あんまり特別感は無いねえ、と言う楓に、きららはおもむろに口を開く。

「――知り合いが召喚されないか、とか、そう思ったりはしないんですか？」
「……うーん、どうだろう。まあ、俺はともかく、榎並さんの知り合いは召喚されたらいいなあとは思ってるよ」
――楓の脳裏に過るのは、未知の世界に呼び出された直後の光景。
自分の話を聞いて、不思議そうに首を傾げる少女の顔で、楓は全てを悟っていた。
「――うん。俺は大丈夫」
「そう、ですか？」
「それよりも大事なのは……」
「だ、大事なのは？」
「夕飯の献立だよ」
「それは大事ですね」
うんうん、と頷くきらら。彼女もまた両親の居ない家庭で育った子供のため、食事の――料理の大事さをよく理解していた。
「――と、そろそろ行かないと」
「おや、お仕事？」
「はいっ、近くの森で魔物が暴れているらしくて。漫画の取材……にもなる？　とかで、翼さんと琉姫さんに手伝ってもらうんです」

楓は多くのクリエメイトの中から、名前と顔をなんとか一致させる。
少年漫画家の勝木翼、ＴＬ漫画家の色川琉姫を思い浮かべて、納得したように頷く。
「そっか。タイミングが合うなら俺も手伝ったんだけど……家事が溜まっててさ」
「大丈夫ですよ、できたらまた今度、一緒に戦いましょうっ！」
「ん。気を付けてね」
手を振ってきらを見送り、さて、と呟いて買い物カゴを揺らす。
「……よし、スープにするか」
そう言って、楓は里の商店街へと足を運ぶ。一瞬頭を通り過ぎる、液体しか口にしない女の顔に表情を歪めながら。

「――お疲れ様でした、榎並先生」
「……お疲れさまです。佐倉先生」
学生の身分でありながら異世界に召喚されたクリエメイトのためにと建てられた、現代の学校を模した建物内。その職員室で、清瀬は――桃色の髪を揺らす女性、佐倉慈と顔を合わせた。
「このような世界に来ても先生をやらないといけないというのは、些か大変ですね……」

「全くだ」
げんなりした顔の清瀬に、慈は苦笑を浮かべて対応する。彼女は隣り合って座ると、荷物の中から弁当箱を取り出した。
清瀬もまた楓から渡された弁当箱を取り出すと、蓋を外して中身を拝見する。
「あら、美味しそうなサンドイッチ」
「……ふむ、結構ガッツリ系だな」
中には照り焼きとチキンとゆで卵、ふわふわの玉子、ＢＬＴのサンドが詰まっていた。
それなりに食べる方である清瀬のことを考え、片手間で食べられるようにとも配慮されたそれを見て、慈はくすくすと笑う。
「なんですか」
「ふふ、いえ……それを作った人は、よっぽど榎並先生が大事なんだなあと」
「……はあ」
疑問符を浮かべながら、清瀬はサンドイッチを食べ始める。隣で同じように弁当を食べ始める慈は、表情を変えないながらも満足そうにサンドイッチを口に入れる清瀬に言葉を続けた。
「サンドイッチって、シンプルだけどそれゆえに完成度が如実に表れるんですよね。それだけ綺麗で美味しそうに作れるということは、榎並先生に喜んでほしいって事です

よ」

「――――」

バク、と一口で残りを放り込み、咀嚼しながら慈の声を耳にして――何とも言えない気恥ずかしさに、誤魔化すように言い返す。

「……そういう佐倉先生は、その料理を振る舞いたい相手とか居るんですか」

「――えっ!?　いえ、その、古木くんとはまだそういう関係とかでは……」

「誰も大上とは言ってませんが」

意趣返しが出来たからか、清瀬もまた口の端を吊り上げて笑い、別のサンドイッチを取り出す。それから不意に、頬を膨らませてむすっとしている慈に問いかける。

「……あいつ、何も言わないんですよね」

「あいつ?」

「秋野です。一応、これを作ったのも秋野」

「あきの……ああ!　秋野くんですか。古木くんが仲良くしている男の子ですね」

慈は得心が行ったように手を合わせて、記憶の中にある眼鏡をかけた人当たりの良い表情をする青年を想起する。

「何も言わない、というのは」

「元の世界に帰りたいとか、知り合いに会いたいとか、そういうワガママを何も言わず

に、嫌な顔もしないで……なにか、感情を押し殺してるような気がするんですよ」
「――――」
「私はあいつの教師ではない。それでも教師としては……放っておけない」
こうやって美味しい料理を作り、家事に洗濯に買い物にと、清瀬の代わりに色々とやってくれる青年は、なにかを隠している。
だがそこに踏み込んでも良いものか、そう悩む清瀬に、慈は言う。
「いつか、話してくれますよ」
「……ですかね」
そうですよ。そう言ってにこりと微笑む慈の顔に、清瀬は毒気を抜かれる。
何故か生暖かい眼差しを向ける慈に、僅かばかりにイラッとした表情をしながら、残りのサンドイッチを口に放り込んでいた。

「ただいま」
「――お帰りなさい」
玄関の扉を開けた清瀬。彼女は室内の暖かさにじんわりと頬が紅潮するのを感じ、部屋の奥からパタパタと足音を立ててやってくる楓を見る。

エプロンを着ている楓は、清瀬を迎えて上着を預かりながらリビングに通す。
「お夕飯、ちょうど出来たのですぐ持ってきますね。今日はスープですよ」
「……それはいいな、今日は寒かった」
「はい」
「あと、弁当箱。旨かったぞ」
「――それはよかった」
弁当箱を受け取り、早速とキッチンに向かった楓を見ながら席に座る清瀬は、少しして持ってこられた容器とスプーンを受け取る。
「玉ねぎとチーズが安かったので、バゲットも買ってオニオングラタンスープにしました」
「凝ってるな……」
「なんと玉ねぎ丸々一つ使ってみました。たっぷり煮込んだので、スプーンで崩せますよ」
清瀬はチーズに覆われたバゲットと玉ねぎをスプーンで崩し、纏めて掬い口に含む。
冷えた体に熱めのスープと具が沁みて、ほう、と湯気が吐息と共に溢れる。
「……一つ聞いていいか」
「はい？　ええはい、どうぞ」

「お前、知り合いに会いたいとか言わないが……元の世界でなんかあったのか？」
「――――」
「……秋野？」
「すいません眼鏡に湯気が」
「おい」
　レンズが真っ白に曇った伊達眼鏡を外して置くと、楓は斜めに視線を向けてから返した。
「色々とありましてね。俺の居たところはそこそこ物騒だったものですから」
「お前日本人だよな？」
「なのでまあ、ちょっと気まずいと言いますか……俺は異物なので」
「……？　なんだって？」
「お気になさらずー」
　冷めますよ。そう言って会話を切り上げると、楓は黙り込む。
　煮込まれた玉ねぎとチーズの甘味に加え、バゲットのお陰で満腹感もある。食べ終えたスープの容器を片付けると、食後のコーヒーを用意して、改めて楓は口を開いた。
「逆に、榎並さんは元の世界に会いたい人は居ないんですか？」
「居ない」

「即答……」
「もしかしたらうちの生徒が来るかもしれないが、ウゼェのが一人居るからな」
「生徒に対する評価じゃない……」
　本当に鬱陶しさがあるのだろう、苦虫を噛み潰したような顔でコーヒーを呷る清瀬。
「……でも、お前ならあいつらとも上手く付き合えるかもな」
「そうですか。じゃあ、会ってみたいですね、生徒さんたち」
「――――」
　同じようにコーヒーを飲む楓は清瀬を見てふっと笑う。この『どちらかの世界から知り合いが召喚されるまで』を期間としたこのルームシェアは、いつか終わる日が来るのだろう。清瀬の知り合いが来たら、楓は独りになってしまう。
　それもあって、清瀬は楓の事情が気になっていたのだが――これ以上は踏み込めないと、なんとなく察して言葉を引っ込める。
「秋野は彼女とか居ないんだな」
「居ませんよ？　惚れた腫れたの話も無いですねぇ。知り合いなんかも女の子ばかりの女所帯なんですけど……」
　天井を見上げて、楓は少し考えると。
「――ないなあ。俺にはもったいない」

「そうか？　家事全般出来る男は優良物件だと思うけどな」
「じゃあ榎並さんが貰います？」
「はっ、バーカ」
「ですよねえ」
　あっはっはと笑って互いにコーヒーを飲み干す。それから一拍間を開けて、楓はじっと清瀬の顔を見ると難しそうに眉間にシワを寄せた。
「……なんだよ」
「いえ、なんというか――名字呼びって他人行儀だなあと思いまして」
「……そうか」
「どうです、これを機に名前で呼ぶというのは」
「――――」
　なんとなしに出された提案に、清瀬もまた眉をひそめる。
『教師として子供を名前呼びというのは』という考えと『そういやこいつのワガママ初めて聞いたな』という考えが同時に頭を過り――。
「……。はぁ――――」
「ため息長いですね」
　清瀬はうつむいて、空になったマグカップを見ると、楓に差し出してポツリと呟いた。

「――楓、お代わり」
「……はい、清瀬さん」
まだまだこれからか、と。そう考えて、清瀬は机に肘をついて手のひらに顎を乗せると、楓の背中をぼんやりと観察するのだった。

榎並清瀬　②

「おや清瀬さん、今日はえらくご機嫌ですね」
「給料日だからな」
「ああー、なるほど」
　ザクザクとホットサンドを齧りながら、表情は変わらないが機嫌の良い清瀬の言葉に楓は納得したように頷いていた。
　エトワリアでもクリエメイト専門の学園で教師として度々授業を開いている清瀬には、当然だが、月に一度の給料が存在している。
「……そうだ、食費なんかはどうする。いつも通りで良いのか？」
「はい、お金は2～3割ほど戴ければ、あとは俺の方でどうにかできますから」
「わかった」
　清瀬の疑問に、楓はエプロンを身に纏い、コーヒーをマグカップに注ぎながら返す。
「そういやお前、どこで稼いできてるんだ？」
「魔物退治をした報酬とか、ライネさんやコルクのお店でアルバイトをしたりですね」
　へぇー、と言う清瀬にマグカップを渡して、二人で中身を呷る。時間が来て席を立つ

清瀬は、残りを飲み干して玄関に向かった。
「じゃあ行ってくる」
「はい。行ってらっしゃい、清瀬さん」
「ああ」
パタンと扉が閉まり、清瀬は出ていった。残った楓は肌寒さに腕を擦って、一言呟く。
「今日は温かいのにするか……」

「――あら」
「おや」
里に買い物にやってきた楓は、ばったりとクリエメイトの一人と出くわす。
「こんにちは、麻冬(まふゆ)さん」
「暫くぶりね、楓」
小柄な体格の少女――否、女性は、気だるげな眼差しで楓を見上げる。
さっと屈んだ楓に満足げに頷くと、麻冬と呼ばれた女性が口を開いた。
「ここ最近うちの店に来ないけど、どうかした？　もしかして、苺香(まいか)に来店の度に罵られるのが限界に達したのかしら」

「いえ、まあ、苺香ちゃんのアレは心臓に悪いんですけどそうではなく」
　一旦立ち上がり、近くのベンチに座り直して二人は会話を再開する。星川麻冬はとあるお店の従業員であり、小さな身長とは裏腹に、その実２０歳の成人女性であった。
「今は清瀬さんが居るので、外食を控えているだけですよ。家事もしてますから」
「……へぇー」
「なんですかその顔は」
　麻冬の妙なことを考えているかのような、にやりとした表情に眉をひそめる楓。
「いいえ。ただ、生き甲斐を見つけたみたいで少し安心してるだけよ」
「えぇ……」
「――そろそろ行くわ、またそのうち店に来なさい。夏帆や苺香が喜ぶし、なんだかんだ、ひでりも貴方を気に入ってるみたいよ」
「では是非、清瀬さんも連れて」
「ふふっ、そうしなさい」
　ぴょんとベンチから降りると、麻冬は楓に背を向けてその場から去る。
　それを見送った楓は、買い物用のカバンを手に立ち上がる。夕食の献立を考えながら商店街を歩いて、おもむろに呟いた。
「――よし、シチューにするか」

そうと決まれば、と楓は鶏肉と野菜を買いに走る。家に着いて、清瀬のためにと気合いを入れた楓だったが、彼の気分が落ち込むのは、それから数時間後の話であった。

「……遅い」

椅子の背もたれに寄りかかって体を伸ばす楓は、用意した空の器を指で揺らして本来であれば向かいに座っていたであろう人物を想起する。

すっかり日も落ち、閉じたカーテンの外は暗くなっている。帰ってこない清瀬を待ちわびる楓はちらりと、キッチンのコンロの上に置かれた、湯気が減ってきているシチューの鍋を見た。

「なにか事件に……いや清瀬さんはクラスが僧侶のわりに腕っぷしは強い。なら、なにか急用が？　給料日の今日に限って――――」

ふと、言葉を区切る。

そういえばと、楓は先月の今頃にも清瀬の帰りが遅かったことを思い出した。

「――――あぁ～～……」

楓がため息をついて、顔を手で覆った。仕方がないとばかりに表情を緩めてコートを羽織ると、楓は家をあとにして目的の場所に向かう。

寒空の下、白む息が空中に漂い、手袋も着けるべきだったかと静かに後悔する。

やがてがやがやと喧騒が聞こえてくる一つの飲食店が視界に入る。
里の住人の一人ことライネの経営する店を視て、見慣れた魔力の反応を視認すると、白い吐息を吐き出しながら店内へと入っていった。

――時を同じくして、店内の一角で知り合い二人と机を囲む清瀬は、コップの酒を呷っていた。中身を半分まで呑むと、しみじみと呟く。
「……私はこのために生きている」
「違うと思いますが」
「ふふ、まあまあ。今日は榎並先生の給料日ですし、このぐらいなら……ね？」
向かいで猪口のような小さい容器で透明な酒を含む青年――大上古木が、隣で清瀬と同じように酒を楽しむ慈にそう言われる。
「ところで、榎並さん。楓にはここに呑みに来ることを伝えてあるのですか」
「あ～？　あー……言った。はず。たぶん」
「それは言ってないのと同じですよね」
酔いが回って頬を染める清瀬は古木の言葉に、一瞬天井を見上げてそう返す。
「今からでも帰った方がよろしいのでは」

「へ――きだろ。先月の今日もここに呑みに来てたし、たぶん言ったし」
「その自信はいったい……」
さしもの慈も呆れの混じった声色で呟き、清瀬もまた、コップの残りを呷ってから続ける。
「楓のやつ……魔物を退治したり、エトワリアでもバイトをしたり、ちゃんとしてるんだよ。そのくせ私の弁当用意して飯も作って――」
はぁ――と深くため息をついて清瀬は言う。
「――なんで私なんだ。なんであいつは私と暮らすことを選んだりした」
「榎並さん」
「私っていう枷なんかないほうが、もっと自由に生きていけるだろ、あいつ」
「あの、榎並さん」
古木と慈は、愚痴をこぼす清瀬を止めようとするが、それでも清瀬は止まらない。
「いっそ今回で嫌われた方がいいのかもな。こんな酒好きで面倒くさがりで、自分の生徒くらいの子供に世話焼かれるような女は」
「すみません榎並さん」
「うるせぇな大上。なんだよ」
清瀬――ではなくその背後を見て、古木と慈はえげつないものを見るかのような顔を

する。
　視線を辿って振り返った清瀬の目に飛び込んできたのは、目尻を細めて、座っている自分を見下ろす、明らかに怒っている楓の姿だった。
「随分と、楽しそうですね、清瀬さん」
「――ふむ、字余り」
「古木さん、別に５７５ではないです」
　楓は思わず呟いた古木にピシャリと言い放ち、改めて清瀬を見下ろす。
「……か、楓」
「お酒、美味しいですか？」
「……ああ」
「それは良かった。どうやら俺の料理より美味しいようで。ええ」
「怒ってるよな、お前」
「いえ別に」
　――それキレてる奴の常套句だろ……という清瀬の内心のぼやきを、不思議と古木と慈は読み取っていた。楓はむすっとした表情を崩さずに、それで、と言って続ける。
「先月も同じような行動を取っていたとはいえ、どうして事前に、呑みに行くことを俺に言わなかったんですか」

「……言ったと思ってた」
「確証がないなら改めて聞きましょうよ」
「……まあ、そうだな」
徐々に酔いで赤らめた顔が冷めて行き、二人をちらりと見てから席を立つ。
懐から金を出して机に置くと、清瀬はコートを羽織っておもむろに声を出した。
「帰る」
「そうしてください……」
「楓、あまり言ってやるなよ」
「はい」
「……わかったか？」
「はい」
淡々と言葉を返す楓に先導されて、清瀬はばつが悪そうに店を出て行く。
残った古木と慈は、顔を見合わせてぎこちなく微笑を浮かべていた。
「なんだかんだ、お似合いですよね……榎並先生と秋野くんって」
「でなければ同棲なんか出来ますまい」
「……古木くんは、呑み直します？」
「はい。お供しますよ」

「なあ、悪かったよ」
「……」
「次からはちゃんと伝える」
「……」
　冷たい空気がほどよく清瀬の酔いを覚まし、前を歩く楓に謝罪を述べさせる。
「清瀬さん」
「――っ、なんだ」
「俺は、別に、帰りに寒い思いをしただろう清瀬さんが暖まってくれたらいいなあと思いながら作ったシチューが冷めたことを怒っているわけではありませんので」
　振り返りすらせずそう言いながら歩く楓に、清瀬は追い付くように早歩きで近づくと言う。
「……なあ、帰ったら食べてもいいか？」
「冷めたやつを温め直したら味が変わるのでほぼほぼ手遅れですがね」
「それでも、お前の料理は旨いだろ」
「……さいですか」

楓はようやく表情を和らげて、清瀬に笑いかける。言いすぎました、と続けて、おもむろに清瀬へと片手を差し出す。
「はい」
「は？」
「まだ酔いが残ってるでしょう。こんな暗さで、転んだらどうするんですか」
「……ああ」
別にいい、と断ろうとも思ったが、今の清瀬は楓への罪悪感が強い。なにやってんだかと独りごちて、差し出された手を握り返した。
「――手、熱いな」
「……ですねぇ」
「……お前も酔ってるんじゃないか？」
「――かも、しれませんね」
ぎゅ、と清瀬が握る手に力を入れて、楓は二人で帰路につく。手が熱いのも、顔が暑いのも、全ては気のせいだと誤魔化して。

榎並清瀬　③

「……寒っ――ん？」

深夜、肌寒さに起こされた楓は、リビングから聞こえてきた物音に眉をひそめる。

「泥棒……なら清瀬さんが叩きのめすか」

念のためにと護身用にクリスタルを浮かばせて寝室の扉を開け、リビングに顔を覗かせる楓だが、そこにいたのはグラスを玩ぶ清瀬だった。

「清瀬さん」

「楓か。悪い、起こしたか？」

「いえ、急に目が覚めちゃって」

片手間でクリスタルを寝室の机に乗せて自分だけがリビングに出ると、清瀬はテーブルの上で灯していたランプの近くにグラスを置く。

「貴女こそ――お酒ですか？」

「その顔怖いからやめろ。ただの寝酒だ」

スーッと冷めて行く表情を前に、清瀬は慌てて弁明する。楓もテーブルに酒のボトル或いは瓶がないことを確認して、自身も水を入れて椅子に座って彼女と向き合った。

「ホットミルクとかは飲まないのか」
「実はホットミルクは朝に飲んでからようやく夜に効果を発揮するんですよ」
「へぇ」
「……それで、清瀬さんはなぜ寝酒を？」
「ああ、寒くて寝られなかったんだよ」
——それで寝酒か。と内心で独りごちる楓は、少し考えてから、じゃあと続ける。
「予備の布団があるので、それを重ねたら暖かいですよ。いま部屋に持っていきますから、そのお酒飲んじゃってください」
「悪いな。……お前はいいのか」
「——俺は大丈夫ですよ」
一拍置いてふっと笑い、楓は水を飲み干して押し入れに向かう。それから畳まれた掛け布団を自分の部屋に持って行く様子を見ていた清瀬は、取り出すのを楓に任せていた為に、予備の布団が一つしかないことを知らなかった。

——ガヤガヤと喧騒の絶えない街を歩く楓は、新たに召喚されたクリエメイト四人を

連れて、清瀬と共に辺りを案内していた。
「――や～、まさか我々が異世界召喚なんてオタク大歓喜のイベントに巻き込まれるとは」
「たまてちゃん、元気だね」
ウサギの耳が頭上に伸びた少女――百地たまてが、楓の言葉にやや過敏に反応する。
「秋野さん、私のことはどうぞ『たまちゃん』とお呼びくださいな」
「……？　別にいいけど……？」
どうぞ是非是非、と押してくるたまてに、首をかしげる楓。そんな彼に、歩きながら側まで近づいてきたもう一人の少女――十倉栄依子がその理由を口にした。
「たまの名前って、玉手箱が由来らしいのよ」
「へえ。おめでたいね」
「いえ、あのですね、確かにめでたい由来なのですが……私の両親は玉手箱を『たまて・ばこ』と区切ると思っていたんですよぉ」
「……あれ、玉手箱の区切りって『たま』と『てばこ』だよね？」
「はいす」
はいす……とおうむ返しする楓は、なるほどとたまての訂正の意味を察する。
「まあでも、玉手箱の『玉』って美称だから、君は『たまちゃん』で良いのかもねえ」

「――――。お、おぉ～……突然の好感度イベントみたいでしたね今の」
「うん……？　――いでっ」
突如としてバシッとふくらはぎを後ろから蹴られ、楓はおもむろに振り返る。
視線の先には、普段よりも不機嫌そうな顔をした清瀬が立っていた。
「……うちの生徒を口説いてる暇があったら、さっさと服屋に案内しろ」
「口説いてませんけど？」
「ほほう……」
「へぇ……？」
ズンズンと先を行く清瀬とそれを追いかける楓の二人を見ながら後ろを歩くたまてと栄依子は、担任と青年の関係を察して口角を緩めた。

「――ここの店員さんは俺の連れの女性を見るたびに『彼女ですか？』って聞いてくるけど、あれは店員さんの国の言葉で『いらっしゃいませこんにちは』を意味するから無視していいよ」
「ええっ!?」
楓の言葉に、一之瀬花名が驚いた様子で声をあげる。クリエメイトの着替えや下着の

購入でお世話になっている服屋に訪れた楓は、早速と彼女らを店内で案内していた。
「あっちが女性モノの下着コーナー、あっちが衣服。とりあえず最低限の衣類は人数分買っちゃうから、選んできてもらえる？」
「……い、いいの？」
「大丈夫だよ、いざとなったら清瀬さんの財布も緩めてもらうから」
「おい」
　しれっと清瀬を巻き込みながらそう言った楓に、横合いから顔を覗かせた栄依子が言う。
「じゃあ、一番高い下着買っちゃおうかな」
「なんでよりにもよって誰にも見せない部分で高い買い物すんだよ」
「見せる用なら良いんですか？　ぴらっ」
「おい」
「うべっ」
　栄依子がおもむろにスカートの端を指でつまむと、清瀬が楓の顎を掴んで横に向ける。
　ゴキリと骨が鳴るがお構いなしに首を曲げながらも、清瀬は青筋を立てて彼女に唸った。

「テメェいい加減にしろよ十倉」
「うわーマジギレしてる……おほほほ～、別に取って食ったりしませんよ～」
苛立つ清瀬と首を曲げられている楓を見て、栄依子はにやにやと口角を緩めてその場を去る。
「ちっ。見てないだろうな」
「首の骨を折られそうになったので見る見ない以前の話なんですが……いてて」
本当に僧侶なのかこの人……と呟く楓は、それから服を選んでいる少女らを見て言った。
「そちらの生徒さんは元気ですねぇ」
「アレは『ウゼェ』って言うんだよ」
「信頼されてるんですよ」
「どうだかな」
心底嫌そうな顔でそう返す清瀬。楓は呆れ気味に苦笑を浮かべて、あっけらかんと口を開く。
「そう言わずに仲良くしないと。明日からは、俺とじゃなくてあの子達と暮らすのに」
「――、――――」
ふ、と。清瀬が言葉を返そうとするが口を閉ざす。『どちらかの知り合いが召喚され

るまで』が期間であった二人のルームシェアは、着実に、終わろうとしていた。
「……楓はそれでいいのか」
「……まあ、元々そういう約束でしたから」
視線を斜めに逸らして楓は言う。何気なく行ったそれが、清瀬の琴線に触れる。
「――おい。それやめろ」
楓にそう言って、清瀬は突然胸ぐらを掴むと顔を引き寄せた。ちらりと視線を向けてきた店員に手のひらを向けて「気にするな」とジェスチャーする楓は、彼女に問い返す。
「……やめろって、何を？」
「その『仕方ない』って考えて諦める態度を、やめろって言ってるんだ」
「――――」
「自分の本心を隠すんじゃねえ。なんだかんだ数ヶ月一緒に暮らしてればな、お前が自分だけ我慢して済めばそれでいいって考えるようなお人好しなのは嫌でもわかる」
ぱっと服を離して、清瀬は続ける。
「……もう一度聞くが、お前は何も、思うことは無いんだな？」
「――まさか」
目尻を緩めて、清瀬を見る楓は、小さくかぶりを振って珍しく表情を崩す。
「とても、寂しくなります。俺は人の為に料理をしたり掃除をしたりするのが好きなの

で、貴女の世話を焼くのが楽しかったんですよ」
「……そうか」
「――俺は薄々、どこかで、ずっとこの生活が続くことを望んでいたんでしょうね」
清瀬に向けた顔を、遠くから服を抱えてこちらにやってくる栄依子たちに向けて、楓は笑みを浮かべながらおもむろに言う。
「今日のご飯、みんなで外食にします？」
「――ふっ、悪くないな」
レジに通された服を見て、財布を取り出す楓は、横の少女たちにもそう言った。
楽しそうにするたまてに、やや申し訳なさそうな花名。無表情ながらにウキウキしている小柄な少女――千石冠（せんごくかむり）。そしてそんな冠を見ながら、栄依子がポツリと呟く。
「秋野くん、いいの？　私たちはともかく、かむはものすごい量食べるけど」
「……？　うん、いいよいいよ。冠ちゃん、いっぱい食べな。育ち盛りだからね」
「やったー」
「……私しーらない」
屈んで視線を合わせながら楓が言うと、冠は表情を変えないが嬉しそうに両手を上げる。
――その日、楓の財布の中身は服代と食事代で９割が消し飛んだ。

――花名たち四人を新たな住居に送ったのち、深夜に布団にくるまる楓は、あまりの寒さから横になったまま目を覚ましてまぶたを開く。
「……さむ」
そう呟いた直後、不意に自室とリビングを隔てる扉が開かれた。枕元に近づいてきた気配が、寝ぼけ眼の楓に声をかけてくる。
「おい、楓」
「……んぁぃ」
「奥に詰めろ」
「……詰め……、指……？」
「エンコじゃねえよ」
そうツッコミながら、声の主――清瀬がぐいぐいと楓をベッドの奥に押し込む。先日に渡されていた予備の布団を楓の布団に重ねると、彼女はモゾモゾと動いて楓の隣に横になった。
「……あの、清瀬さん？」
「寒いんだろ。ったく、一つしか無いのに自分は後回しか。寒いのは財布だけにしとけ」

「……レストランで少しくらい出してくれても良かったと思うんですけど……」
「自分の分は出した」
ちゃっかりしている……と独りごちる楓は、布団の中で清瀬の腕と自分の腕が当たり、気恥ずかしさから背中を向けて壁を見るように寝る。そんな背中に、静かに清瀬の声が届いた。
「楓。私は一応、お前が向けてくる感情については察しているつもりだ」
「……そうでしたか」
「流石にそこまで鈍感じゃない。でも、私は教師だ。だからその気持ちには答えないようにするべきだと思って、目を逸らしてきた」
背後で寝相を変える清瀬の動きが伝わり、布団の中の温度が上がって行く。
「だから、まあ、なんだ。いいか？　この先を含めて、一回しか言わない」
ひた、と手のひらが楓の腕に触れ、清瀬の吐息が肩やうなじに当たった。
「――私はきっと、お前と同じ感情をお前に向けている。楓には、ずっと……助けられたよ」
「……」
その言葉に、楓が返答することはなかった。ただずっと、楓は朝になるまで、腕に触れた手を眠りながらも握り続けていた。

――翌日、楓が起きたときには、既に清瀬の姿と荷物はどこにもなかった。
まるで夢でも見ていたかのような感覚になりながらも、体はルーティーンとなった動きで、つい二人分の食事を用意する。
「……なぁにやってんだか」
片方を昼食用にするかと蚊帳を取るべく立ち上がった楓だが、その背中に重圧がのし掛かったかのように、重苦しいため息をつく。
「――どうにも慣れないな」
やれやれとかぶりを振って切り替えようとした楓だったが、不意打ちのように、玄関の方でガチャガチャと鍵を弄る音が聞こえてくる。
何事かと思い、驚きで肩を跳ねさせながらも玄関に向かうと、ガチャリと開け放たれ――
「……よう」
「清瀬さん!?」
――中に入ってきたのは、大きなカバンを手にした榎並清瀬であった。
後ろ手に扉を閉めて鍵を掛ける彼女に、楓は驚愕を隠さずに問いかける。

「な……なんで???」
「……なんでだろうな」
カバンをどさりと床に置きながらそう言った清瀬は、栄依子たちが使うことにした家からUターンしてきた時の会話を脳裏に浮かべる。

『先生、帰った方がいいんじゃないですか?』
『は?』
『秋野くんと一緒に居た〜いって、わかりやすく顔に書いてますよ』
『――――』
『あは、愛されてますね。あの子』
『強めにぶっ飛ばすぞ』

苛立たしげに眉をひそめていた清瀬だが、ぽかんとした顔の楓を見て、切り替えるようにしてふっと笑うと、愉快そうに言った。
「新しく、この家でルームシェアをする期間を設けないか。例えば……『お互いが元の世界に帰るまで』――なんてどうだ?」
「――ふふ。なんというか……素直じゃないですね。俺も、貴女も」

くつくつと笑って、楓は清瀬の案を聞いて嬉しそうに目尻を緩める。
楓は笑みを浮かべて玄関に立つ清瀬を見ると、心の底からの言葉を彼女に伝える。―
―清瀬もまた、楓の顔を真っ直ぐ捉えて言葉を返した。

「お帰りなさい」
「ああ、ただいま」

十倉栄依子　①

「――神殿に行ったときに異様にチョコを渡されるなあと思ったらさ、よく考えたら今日ってバレンタインデーだったんだよね」
「それを俺の前で言うってことは喧嘩を売ってると受け取って良いんだな？」
「沸点低くない？」
　元の世界の部室を模した一室で、秋野楓（あきのかえで）は、『ステラのまほう』の聖典から召喚された異物――犬井燎原（いぬいりょうげん）と会話を交わしていた。
「なんだなんだ、男二人で俗な会話だな」
「あやめちゃん、俺が何故か燎原にキツく当たられてるだけだよ」
「いや原因はハッキリしてるだろ……まーでも、犬井も私らからチョコ受け取ってるんだし、下らない喧嘩はすんなよな」
「人のこと言えないじゃん」
　関あやめの視線を辿ると、机の一つに山積みの様々な箱が甘い香りを漂わせていた。
「俺は自慢した覚えがない」
「俺も自慢した覚えはないよ……？」

「なら誰から貰ったか言ってみろ」
「……アルシーヴとフェンネルとセサミとハッカちゃんとシュガーちゃんとソルトちゃんとランプちゃんと、あとクリエメイトの子から何個か」
「そういうとこだぞ」
「……??」
　ほらみろと言わんばかりに燎原はあやめを見る。彼女もまた、仕方ないとでも言いたそうな表情でかぶりを振ると口を開く。
「楓さんめっちゃモテるじゃん」
「……いや、どうだろう。友チョコって奴だと思うよ。元の世界でもこんな感じだったし」
「そういうとこだぞ」
「傷の入ったＣＤかお前は」
「ンッフ」
　部屋の端で会話を聞いていたＳＮＳ部の音楽担当が、楓の例えに小さく笑う。
　すると、燎原の近くで絵を描いていた少女――本田珠輝が、おずおずと会話に混ざった。
「……りょーくんも小学生の時、わりとチョコとか貰ってたよね」

「やっぱり人のこと言えないじゃん」
「あっ、でも、中学校は違うところだったからその辺りはわからないかも」
「被告人、実際のところは」
「誰が被告人だ。……いや、そこまで貰った覚えはないが……」
「その言い方はそこそこ貰った事がある奴の誤魔化し方だぞ」
珠輝と楓に問われて、燎原は顎に指を当てて思い返す。楓ほどではないがそれなりに貰った記憶のある燎原は、視線を斜めに移して言う。
「――それで、だな」
「誤魔化しおったぞこの鶏……」
誰が鶏だ、と言いつつ、おもむろに楓が横に置く袋を指差して続ける。
「俺としては七賢者チョコがどんなものか気になるところだな」
「子供向けお菓子みたいな名前だね」
「あー、ウエハースと一緒にカードが1枚入ってるやつ」
「七賢者から貰ったやつ？　……あっそうだ」
なにかを思い付いた楓は、袋の中のチョコをがさごそと漁り、一つの包みを取り出す。
可愛らしくラッピングされた小さな袋には、幾つかのトリュフチョコが入っていた。
「一つあげよう、食べてみろ」

「……？　施し……戦争か？」
「燎原って元の世界でもこんな物騒なの？」
「うーん……楓くんと仲良くなってからこうなったから、男友達が新鮮なのかも」
「それじゃあ俺のせいみたいじゃん」
　すっとんきょうな顔で物騒な物言いをする燎原に対し、珠輝に問いかけ頬をひくつかせながらも有無を言わさずトリュフチョコを一つ渡す。
「……これ、誰が作ったチョコなんだ？」
「食べて当ててみ」
「……。南無三」
　まさか毒は入ってないだろうと考えながら、燎原は手のひらに転がるそれを口に放り込み――パキ、と割れて中身が溢れて。
「――ん、普通に旨いな。結構甘いが……いやちょっと待てこれは甘過ぎうぶおぼ」
「りょーくーーん!!?」
「あー、やっぱりかぁ」
　口内で甘味が暴れだしたトリュフチョコを噴き出しそうになった口許を押さえて、燎原はソファに座りながら踞る。
　慌てて珠輝が差し出したお茶を一息で飲み干すと、呼吸を荒らげて楓を見た。

「こ……殺す気か……！」
「いや、ここまでとは思ってなくて」
「……これ、シュガーの作ったチョコだろ……」
「正解」
「『正解』じゃないが……」
あまりの甘さに喉が焼けるような感覚に襲われる燎原は、注がれたお茶をもう一度飲み干す。楓は同じように一つを放り込むと、口の中に広がる凄まじい甘さで顔をしかめる。
「チョコ自体に生クリームと大量の砂糖、トリュフチョコの中身に練乳とハチミツが入ってるな。おーこりゃ……うん、甘い」
「楓……お前、よく耐えられるな」
「まあ、慣れよ。慣れ」
七賢者のうち、双子の片割れであるシュガーは、とにかく甘いものが好きな究極の甘党であった。そんなシュガーが作ったとなればこうなるだろうと察していたため、楓は燎原を当然のように毒味に使っていたのだ。
「さてこっちは……ソルトちゃんのチョコか。おや手紙入りだ。えーっと」
楓は別のチョコの入った袋を取り出すと、ピンで留められていた小さな手紙を広げ

る。

「……『楓お兄様へ。シュガーのチョコレートはとても甘く作られていると思うので、私のチョコは苦い種類を使用しています。一緒に食べれば、程よく和らぐと思います。ソルトより』

――妹のことをよく理解してるなあ……てっきり塩チョコでも入ってるのかと思ってた」

「楓、七賢者にお兄様って呼ばれてるんだな」

「そこは引っ掛からなくて良い」

やいのやいのと会話をしている二人だったが、ふと出入口の扉がノックされた音に意識を向ける。やや掠れた燎原「どうぞー」という声を聞いて、ノックした張本人が部屋へと入ってきた。

「――お邪魔しまーす」

「おや。栄依子ちゃん」

「おー、楓くんほんとに居た」

ひょこりと顔を覗かせたのは、『スロウスタート』の聖典から召喚されたクリエメイトの一人である十倉栄依子（とくらえいこ）であった。

タートルネックのような衣服の肩と腋の辺りを露出した格好を着こなしている栄依

子は、後ろから楓の方を覗き込み――山盛りのチョコレートを入れた袋を視界に納める。
「ほんとに居た、って誰に聞いたの？」
「……。んー、ここの人。えっと……布田、裕美音ちゃん、だったかな」
「ああ、裕美音ちゃんか」
「あれっ、苦手？」
「苦手というか……俺を見る目付きがなんかねっちょりしてるときがあってさ」
「――――同情はする」
「なんで……？」
栄依子との会話を聞いて、燎原は顔を覆う。彼は、ＢＬ好きの幼馴染が勝手に自分と楓をカップリングさせていることを知っていた。
――顔を覆うついでに、栄依子がそれとなく手に持っていた何かを後ろに隠す様子を見て、楓に視線を移すと薄く笑って口を開く。
「……ふぅん、なるほど……さて、楓、そろそろ作業があるからとっとと帰れ」
「なんだい急に」
「邪魔だから帰れ」
「えーっ、酷くない？」

『酷くない？』は無断で毒味役に選ばれた俺がお前に言うべき台詞だ」
　しっしっ、と手を払うジェスチャーをする燎原の態度の変化に小首を傾げつつも、仕方ないと楓は袋を手に立ち上がる。
「ついでに十倉を送ってやれ。女性のエスコートは男の仕事だ」
「言われなくてもするって……ごめんね栄依子ちゃん、来て早々に帰ることになって」
「ううん、いいのよ」
「そういえば、なんで俺を探してたんだ？」
「――――」
　ぎくり、と栄依子は色白の肩を跳ねさせた。後ろで組んだ手に乗せられた物を渡しに来た、とはなんとなく言えなくて、つい言葉に詰まる。
「まあいいか。なんか甘いもの食べすぎて眠くなってきてるし」
「いっそのこと三食チョコレートでいいんじゃないか？」
「燎原、俺が糖尿病で死んでエトワリアを去る事になったらどうするんだ」
「それは、とても、面白いと思います」
　――言うと思ったよ……と返して、楓はため息をつきながら扉に近付く。
「全く。邪魔物は帰りますよ～」
「そうしろ。――十倉、頑張れよ」

「……えっ？」
楓に続いて部屋を出ていこうとした栄依子に、燎原はそんな言葉を投げ掛ける。
顔を向けた彼女が見たのは、力なくひらひらと手を振る燎原の姿だった。
「ねえりょーくん、なんで作業なんてないのに楓くんたちを追い出したの？」
「……ふっ。人の恋路を邪魔するやつは、馬に蹴られて死んでしまうからだ」
まだ僅かに喉に残る違和感を洗い流そうと、3杯目のお茶を飲みながら燎原は言う。
そんな燎原に、楓で遊ぶのが楽しいのだろうと察している珠輝は質問していた。
「……本当のところは？」
「――浮いた話の6つや7つはあるだろう楓に修羅場が訪れたら面白いだろう」
「それ、浮くどころか沈まない……？」

――夕焼けが帰路を鮮やかなオレンジに照らし、二人の影は細長く伸びてゆく。
「……楓くん、チョコいっぱい貰ってるけど、それ全部にお返しするの？」
「そりゃあまあ、貰った以上はお返しするのが礼儀だからねえ」
「アハ、大変そう」
「大変だよー。でも、何人かに渡すついでだとしても、貰えたら嬉しいもんだよ」

何気なくそう言った楓に、栄依子は表情を暗くする。あくまでも義理であるという前提が頭にある楓には、これを渡したところで――と、手の内に隠す箱をぐっと握った。
「ねっ、楓くんは、犬井くんたちとバレンタインデーの話をしてたんだよね」
「そうだよ」
「じゃあ……やっぱり元の世界でも、チョコ、貰ったことあるの？」
「あるよ。あるけど――楽しむ余裕があんまりなかったからなあ、こっちはこっちでなぜか闘技場で戦わされたりしてたし」
あったね～、と言いながら、遠い目をする栄依子。――そういえば、あの時もチアの子とか地学部の子から貰ってたっけ、と考える。
楓本人が義理だと思っているだけで、去年のチョコも、今年のそれも、殆ど全ては本命なのだろうということだけは理解できた。
「……う――――ん」
「栄依子ちゃん？　どうしたの」
「……楓くんが悪いのよ」
「なにが？」
「――はい、ちょっとこっち来て」
栄依子自身、元の世界でも相手をからかうことはあったが、天然気味の青年にここま

で心をぐらつかされるとは思ってもみなかった。
　里の広場にあるベンチに座ると、隣に楓を座らせて質問を投げ掛ける。
「なにか、私に言うことがあると思うの」
「え――――っと……その服可愛いね。栄依子ちゃん美人だから、凄く似合ってる」
「う〝っ……そうじゃなくて」
　ふっと笑いかけながらそう言われ、不意打ちの褒め言葉に胸を押さえる栄依子。
　違うのか……と呟く楓は、栄依子のどこかムッとした表情に、少し考えて聞いた。
「――もしかして、バレンタインデー？」
「ん。もしかしなくてもそうです」
「……俺に、渡すつもりだった？」
「――――」
　こくり、と頷いて、彼女はずっと持っていた箱を楓に差し出す。赤い長方形の箱を受け取ると、楓は開けて良いかと短く聞く。許可を得て開けると、中に入っているのは、型で固められたシンプルなハートマークのチョコレートだった。
「楓くん」
「なあに？」
「それ、義理じゃないからね」

ポツリと呟かれた言葉に、楓はピシリと固まった。一拍置いて、チョコと栄依子を交互に見ると、本気で狼狽えながら聞き返す。
「……うん!?」
「本命的なやつだから、『義理でも嬉しいよ』とか言われたら、ちょっと悲しいかな」
「――そっか」
ちらり、と栄依子の顔を見る。
夕陽でわかりづらいが、その顔は、間違いなく真っ赤に染まっていた。
そこでようやく、楓は、渡されたチョコの山を見て、もしかしたらと真意を察する。
「……はぁ～～～～、この馬鹿野郎」
「えっ、どうしたの？」
「いや。自分の馬鹿さが嫌になってた」
恐らく元の世界でのバレンタインデーでも、本命チョコはあったのだろう。
それに気づけなかった自分の愚かさに薄く笑いながら、楓はおもむろにチョコをつまむ。
「――いただきます」
一口で放り込み、じんわりと口内で溶けるチョコを咀嚼する。ただチョコを溶かして固めたのではない、湯煎の時点から丁寧に作らないと味わえない舌触りの良さに、楓は

満足そうに頷く。

「……甘いなあ」

「えっと……甘過ぎたかな」

「ううん。そうじゃないよ」

栄依子のチョコは、とても甘い。シュガーのトリュフチョコよりも遥かに控えめだが、けれども確かに甘く、暖かくて。

――不安そうに揺れる、星のようにキラキラと輝く緑の瞳が、なによりも愛おしかった。

十倉栄依子　②

里を出て暫く歩いた先にある川辺で、栄依子と楓は魔物退治に勤しんでいた。
水属性の敵と相性が良い土属性の魔法使いである栄依子をサポートしている楓が、川にクリスタルを使った魔法の弾を撃ち込み、魔物の動きを止めて隙を作る。
「これで――終わりっ！」
「ちょっ、その威力だと――」
そこに栄依子が渾身の魔法を放ち、魔物を巻き込んで川を爆発させる。
「よしっ……うわぷ」
咄嗟にその場を離れた楓の目の前で、栄依子は降ってきた川の水を頭から浴びていた。
「うわぁ～やっちゃった」
「栄依子ちゃん、考えて撃たないと」
「はぁい。――というか楓くん、今一人だけそそくさ逃げてたよね？」
「はて……」
とぼける楓に、栄依子はむすっとした表情をするが、更になにかを言おうとして、ぶ

るりと身震いしてくしゃみを一つ漏らした。
「――っくしゅ」
「ああもう、こんな時期に水なんて被ったら寒いに決まってるでしょうに」
楓は着ていたコートを脱いで栄依子に羽織らせる。震えながら袖を通す彼女は、ブカブカのコートにすっぽりと体を納めて笑みを浮かべた。
「ふふ、ありがとう楓くん」
「帰りは陽射しに当たりながら帰ろうか。――それにしたって、その格好だと遅かれ早かれ風邪とか引きそうなものだけどね」
「うーん、でも戦うときにこの格好だと不思議と力が湧いてくるし……」
「それでも見てるこっちは心配になるよ」
コートの前を開けて、栄依子は濡れた衣服を楓に見せる。妖精を思わせる可愛らしい服装だが、肩と谷間を露出するデザインを目にして、それとなく視線を逸らした。
「――あ、今どこを見たのかな～？」
「……だから心配だって言ってるんでしょうが」
「――――」
楓は手を伸ばしてコートの前を閉めると、濡れた前髪を指先で掻き分けて続ける。
「帰ったら着替えて、ライネさんのところで温かいものでも食べようか」

「……あー、うー……はい」
真面目な顔で冷静に諭されて、栄依子は今になって恥が勝り顔を熱くしながらボタンを閉じる。特にどうとも思っていなさそうな楓に、どことなく不満を覚えながら。

「ということがあったんだけど、犬井くんは楓くんの行動、どう思う?」
「衝撃の真実かもしれないが、実はＳＮＳ部の作業部屋は懺悔室じゃないんだ」
妖精のような服装からバレンタインの時のニット服に着替えた栄依子は、毎度のごとく燎原の厄介になっていた。
「ふん。とどのつまり、十倉は楓に色目を向けたのにあしらわれて負けた気分になったと」
「なんかトゲのある言い方じゃない?」
「原因そのものの言い草がそれか……?」
半ばのろけ話である愚痴を聞かされている燎原は、栄依子を見てそう返す。
「――まあ、あいつも女に囲まれていてはそういう態度を取らざるを得ないのだろう。しかも、なんか本人曰く見慣れてるらしいし」
「見慣れてる……???」

「あいつの知り合いはいまだに召喚されていないようだが、あの七賢者のセサミに勝るとも劣らない露出度の仲間がいるんだとか」
「えぇ……」
　――そりゃあ慣れるものだ。と燎原は言うが、耐性の付け方が『毒キノコを食べて死ぬな』となんら変わりないことに栄依子は引いていた。
「ともあれ、俺としてもお前たちが乳繰り合っているのは見ていて面白いのだが」
「だが？」
「ここから先は有料です」
「え――っ」
「金は要らん。消え物か面白いエピソードを献上したら話してやろう」
「すごい態度……あ、チョコ持ってきたんだけどこれでもいい？」
　ソファの傍らに置いていた紙袋を取り出すと、栄依子は燎原に渡す。
「神父様、つまらないものですが」
「……ふっ、お主も悪よのう」
「おいこら鶏、神父っつってんのに悪代官ムーブしてんじゃないわよ」
　そこでとうとう、部屋の奥で流れを見守っているクリエメイトの少女――飯野水葉が作業をしながらツッコミを入れていた。

「なあ十倉、この明らかに開封済みのチョコの箱はいったいなんだ」
「あ～～～、それ、バレンタインチョコ作りのあまりなのよ」
「……まあ、いいだろう。水葉、お客さんに粗茶を淹れてさしあげろ」
「それ本人を前にして言っていいやつ？」
　紙袋を閉じて水葉に渡すと、露骨に面倒くさそうな顔をしながらも水葉は別室に向かった。少しして戻ってくると、栄依子と燎原と自分の３つのマグカップをトレーに乗せて戻ってくる。
「粗茶よ」
「どうも」
「粗茶よ」
「ありが……この粗茶、なんだか凄く嗅ぎなれた甘い香りの茶色い液体なんだけど」
　受け取ったマグカップを覗く栄依子は、湯気に混じった香ばしいカカオの匂いを嗅ぐ。
「うちではバレンタイン以降、大量に余ったチョコレートをホットチョコに加工して飲んでいる。乃々辺りがニキビに怯えて口にしないから、もっぱら俺を中心に消費しているわけだ」
「そ、そう……。――あっ美味しい」

一口すすり、栄依子はほっと一息つく。それから燎原が、おもむろに口を開いた。
「十倉、お前、楓の弱みを見たことはあるか？」
「えっ……たぶん、無いけど」
「俺はある」
「――なんでいま急に喧嘩売ってきたの？」
困惑と煽られた苛立ちの混ざった表情を向ける栄依子に、燎原は続ける。
『歳のわりに落ち着いていて、冷静で紳士的なかっこいい青年』。さて、だーれだ？」
「……えっと、楓くん？」
「正解。それが、お前や他のクリエメイトが楓に抱く印象だ。だがそれ以外は知らない」
「――――」
ホットチョコをすすり、燎原は栄依子を見る。まるで心の内を見透かされているかのような瞳に射抜かれて、おずおずと返した。
「私は確かに、楓くんのことをあまり知らないのかもしれないけど……あの人も全然無防備なところを見せないじゃない？」
「それは十倉があいつの行動ルーチンを把握していないからだ。例えば――」
一度壁の時計を見ると、一拍置いてから言う。
「この時間帯に俺のところに来ていないということは、恐らく今ごろは里の広場のベン

チでひなたぼっこでもしながら昼寝してると思うぞ」
「……老後のお爺ちゃんかなにか？」
「気になるなら見てくるといい。古今東西、好きな相手の弱いところっていうのはな、知っているだけで嬉しくなるものだ」
　燎原はホットチョコの残りを一息で呷り、マグカップを机に置く。栄依子もまた、手元のマグカップを見て決心したように呟く。
「好きな相手の弱いところ、か」
「さあ行きなさい、楓の無防備な寝顔を拝んでギャップに萌えるのです」
「――ありがとう、神父様！」
「……いや、なにこれ」
　詐欺師に言葉巧みに丸め込まれている生娘の走り去る背中を見送る水葉は、呆れた表情で茶番に対してそんな言葉を呟いていた。
「あんた、将来はカウンセラーでもやりながら詐欺師も兼業したら？」
「冗談はよしてくれ」
　背もたれに体を預けながら頭を逸らして、背後の机に向き合う水葉を上下逆に見ながら、栄依子を焚き付けた燎原は続ける。
「あの小娘を含めてクリエメイトの何人かは楓に好意を向けているが……楓自身は弱み

を見せたがらない。意地を張っているのかは知らん」
「ふうん？」
「だからこそ、さっきも言ったが、要するにギャップ萌えなんだよ。ああいう堅物がふとしたときに見せる弱みとか甘えは、十倉みたいな女性にはクリーンヒットする」
「……ああ、なるほど」
水葉は体重を預けてギィと椅子を軋ませて、片手に持つマグカップの中身をすする。
「ま、一理あるわね」
「水葉にもその手の理解はあるんだな」
「――――うるさい」
「えぇ……」

――ぽかぽかとした陽射しが栄依子を暖める。水に濡れたあのときもこんな陽射しのなかを歩いて帰ったなあという考えが脳裏を過り、くすりと小さく笑いながら里を歩く。
「――あ、本当にいた」
里の広場付近のベンチに近づくと、見覚えのある顔の青年が眠っている。

気持ち良さそうに寝息を立てる楓に近づくと――楓の周りに幾つかの毛玉があった。
「くっ！」
「くーっ！」
「くー!?」
「クロモンも居たのね……懐かれてるのは、楓くんらしいというかなんというか」
エトワリアに存在する魔物の一種である猫のような見た目の、帽子を被った生き物――クロモンが、楓の膝や横に座って同じように陽射しを浴びていたらしく、栄依子の気配に反応して起きるや否や独特の鳴き声を上げた。
神殿にて七賢者などに協力している個体も居るため、楓に懐いている里のクロモンに関しては、さほど違和感はない。
「あー、その、静かに。ね？」
「くっ」
「楓くんが起きちゃうから」
「くー……」
仕方ない、とでも言いたげな声色で静かになると、クロモンのうちの一匹がベンチにスペースを作って楓を起こさないように小さく鳴く。
「くっくー」

「えっと、座っていいの？」
「くーっ」
「あは、ありがとう」
スカートを押さえながらそっと座り、楓と同じ目線で里を見渡す。すやすやと眠る楓の横顔を見て、おもむろに指を伸ばして頬を撫でた。
「……なるほど、これが弱み……」
栄依子は普段から、楓の笑う顔、戦うときの真剣な顔などは見てきたが、こうも無防備な寝顔などは初めて見た。栄依子の胸にどこか”きゅん”と来るものがあり、脳裏に『ようやくその領域に至ったか』と師匠面をする燎原の顔が浮かぶ。
「――膝枕、とか、しちゃったり」
ベンチの端に座る楓の反対に寄ってから、栄依子は楓の肩を引っ張り、頭を倒させるとそっと自分の太ももに乗せる。楓の腹に座る位置をずらすクロモンの動きに微笑を浮かべて、その流れでおもむろに髪を指で梳すように触れた。
「おお、意外といい髪質……えっこれもしかしてお高いシャンプー使ってる……？」
無防備なところに触れて、初めて気付く。
栄依子の目に映る今の楓は、ただの１５歳の青年でしかなくて――
「――好きな相手の弱いところ。それを知ってもなお、こんなにも愛おしくてたまらな

いなら、この気持ちも悪くないかもしれないわね」
少なくとも、楓の寝顔を今は自分だけが独占している。この現状に、栄依子は確かな優越感を覚え、それからちらりと辺りを見渡した。
「……。皆には、内緒よ？」
「く、くーっ」
クロモンを前にして、指を口許に当てる栄依子。彼女のジェスチャーに対してクロモンたちは帽子で顔を隠す動きを取り、栄依子はふっと笑い、人通りが少なく誰もこちらを見ていないことを確認して――寝ている楓に顔を近づける。
――果たして栄依子が何をしたのかについては、クロモンのみぞ知る。

十倉栄依子　③

「なんで俺は燎原と買い物に出掛けないといけないんですかね……」
「だってお前、ホワイトデーのお返し選びとかできないだろ。とりあえずチョコで返せばいいってもんじゃないんだぞ」
　春の暖かさが顔を覗かせる3月も中旬。ホワイトデーの空気に包まれている里を歩く楓は、朝から外に駆り出されていて欠伸を漏らした。
「朝早くから『ホワイトデーの時間だ、コラァ！』とか言いながら声と勢いとは裏腹にすごい優しい動きで玄関から入ってきた燎原を見たときは、ついに頭が壊れたのかと疑ったよ」
「お前いま『ついに』って言ったか？」
「はて……？」
　まだ少し寝ぼけた思考を回してとぼける楓に、渋い顔を向けた燎原は頭（かぶり）を振る。
「それで、こんな日に朝から俺を駆り出させて何をしようってのさ」
「当然、ホワイトデーのお返しを用意する手伝いに決まってるだろうが」
「きみ人のこと言えなくない？　ＳＮＳ部の子達から貰ってるでしょ？」

「たま達に返す分はとっくに用意してある」
わあ周到、と返す楓に燎原は続ける。
「……ところで、お前、バレンタインの時に具体的に誰から幾つ貰ってるんだ？」
「えー、あー……調停の仕事で居なかったカルダモン以外の七賢者と、アルシーヴと、ランプちゃんと、チア部のこはねちゃんたちと……地学部のみらちゃんたちと……アイドルのイノちゃんたちと……芸術科の如月ちゃんたちと……喫茶店の夏帆ちゃんたちと……キャンプやってるリンちゃんたちと……あとは栄依子ちゃんたちから？」
脳裏で数えながら何度も指を畳んでは広げる楓のカウントが終わるのを待ち、それから燎原は、にこりと笑いながら肩を叩いた。
「ちょっと地獄に行ってみない？」
「気軽に行ける場所じゃないよ？」
「――まあ、まあいい。お前は大罪人だが、渡した方に罪はない」
「俺の罪とは」
「たぶん俺と古木さん以外の男に同じ事を言ったら強めに殴られるぞ」
「そんなことある……？」
などと駄弁りながら歩く二人は、バレンタインデーとホワイトデー限定で朝から開かれているお菓子店にやってきた。

「ここで各グループ用に菓子類の詰め合わせを買って、向かいの美容品や小物を売っている店の商品とセットで渡してこい」
「普通にチョコだけでよくない？」
「馬鹿」
「シンプルな罵倒はだな……」
　はぁと呆れた表情でため息をつく燎原が、陳列されたお菓子を見て回りながら、着いてくる楓に背中越しに説明を始める。
「ホワイトデーのお返しは色々なお菓子や美容品などで意味が変わる、と言われている。クッキーなら『友達でいよう』、マカロンなら『貴方は特別な人』だったりな」
「はえー」
「……とは言ったが、今回に限ってはそういう特別な意味的なモノは全て忘れろ」
「なんで？」
　ちらりと楓を見ると、鼻で笑って言う。
「お返しはお返し、本命は本命だからな」
「本命て」
「お前が十倉に惚れているのは知っている。面倒くさいから誤魔化すな」
「ぬっ――んん、あー……おぉん……」

図星を突かれて表情をひきつらせ、楓は観念したように首を擦りながら頬を染める。
「男の赤面はキツいからやめろ」
「うるさいなあ……誰のせいだよ、まったく」
「……とにかく、七賢者たちとアルシーヴとランプ、それと鳩谷とか木ノ幡、桜、山口……他多数の分は、さっきも言ったが詰め合わせで良いだろう。向こうも大人数がお前一人に渡したと分かっているだろうから、数人分で纏めて返されるのは想定済みと見ている」
「燎原がそう言うなら信じるが、結局『ホワイトデーのお返しの意味は忘れろ』ってなんなの」
　ああ……と言って燎原はさらりと返す。
「結局のところバレンタインデーなんてものはお菓子業界がチョコレートを売るために考えた文化だ。ホワイトデーの意味がどうこうだって、所詮はマナー講師が考えたでっちあげだからな」
「なんか恨みが籠ってないか？」
「……俺のことはいいんだよ。ほら、お前は十倉に返す以外のお菓子を選んでこい。俺はあっちの店で適当な美容品と小物を買ってきてやる。なるべくお菓子はダブらせるなよ」

パンパンと手を叩いて行動を急かす燎原。楓はくつくつと喉を鳴らして商品を選ぶために踵を返すと、店の奥へと足を運んだ。

「――長く、苦しい、戦いだった……」
「全くだ……最後にアルシーヴとフェンネルに渡しに行こうとしたら調査で洞窟に行ったとか言われたし、向かった先では何故か古代の魔物の封印が解けそうになっていて再封印のための時間稼ぎのための戦いに巻き込まれるし……お返しはなんとか渡せはしたからよかったけれども」
単なるホワイトデーのつもりだったのにな……と続ける楓は、ボロボロの姿となっている燎原が破れた鶏マスクを脱ぐ様子を横目で見る。
「しかしまあ、これで十倉以外へのお返しは完了したな。朝から昼まででこれなら及第点だ、残りの時間は十倉へのお返しの時間に当てられる。俺の判断は……正しかった……！」
「燎原、大丈夫か？」
「……今日ほど自分のジョブがナイトであることを呪った日はないだろうな」

マスクの煤をはたいて落としながら恨み言のように呟く燎原が、皮肉気味に楓に言った。
「お前の『眼』が羨ましいよ」
「あっはっは、仮に燎原が俺と同じ眼を得るに至る過程を味わったとしよう。その時は俺に向かってこう言うことになる、『悪かった』とね」
「――なら、やめておこう」
何気ない言葉に対して正しく目が笑っていなかった楓に、燎原はまずいと脳裏で独りごちて誤魔化した。それはそうと、と話題を切り替えて武器と同じようにマスクを消すと更に続ける。
「さて……十倉へのホワイトデーのお返しだが、どうする？　お前のことだ、十倉に渡すモノだけは自分で選びたいんじゃないか？」
「……エスパーかなにか？」
「元の世界でも言われたことがあるぞ」
からからと笑いながら、燎原は首を回してゴキゴキと骨を鳴らしながら背中を向ける。
「じゃあな。俺は、帰って二度寝を敢行する」
「情けない発言も堂々と言うと様になるな……」

言葉は情けないが、そう言うのもわからなくはない、と楓は密かに同情する。
自分の先読みによる指示で急所を避けながらも全員に向かう筈の攻撃を請け負っていた燎原は、今日はこのまま寝込むだろうと思案した。
「……次に遊びに行くときはお土産持ってこう」
ふう、と一息ついて、楓は意識を切り替える。エトワリアで出会い、想いを向けられ、また自身もいつしか想いを向けていた相手――十倉栄依子に何を送るべきかと悩んでいた。
手作りチョコレートのお返しに商品で返すのはいかがなものかと思うが、日本に居た頃とは違って貰う数も返す数も多すぎていた。
仕方がないと妥協して、ならばと、せめて特別だとわかるようなモノを贈ろうと考える。
「――うーん、せめて『これだけは贈るな』って物だけでも聞いておけばよかったな」
まあ、なんとかなるか……と考えながら里を歩く楓は、おもむろに、鼻孔をくすぐる香ばしい匂いを辿って、とある店に視線を向けた。
「……あれが良いな。あとは小物か」
大切な人への贈り物という悩み。元の世界では考えたこともない思考に振り回される現状を客観的に見て、楓は薄く口角を緩めていた。

――時間は過ぎ、夕焼けが顔を覗かせる。小さな紙袋を手に、普段使いのベンチで相手を待つ楓は、ようやくやってきた少女に笑いかけた。
「お待たせ、楓くん。待たせちゃった？」
「今来たところ……って言いたいところだけど、今日は朝からあっちにこっちに行ってたよ」
「へぇ～、大変だったみたいね」
「まったくその通り」
ふふ、と笑みを浮かべる栄依子を前にして、楓は不思議と今日の疲れが吹き飛んだ錯覚を覚える。じゃあ、と言って、楓は紙袋を手渡す。
「今日はその、ホワイトデーだから……先月のお返しをと思いまして、はい」
「――ああ……、ぇへ、ありがとう」
虚を突かれたように一瞬驚きながらも、栄依子はふにゃりと表情を緩めて紙袋を受け取る。
二つある内の片方から香るリンゴの匂いに、もしやと思い口を開いた。
「これ、アップルパイ？」

「うん。何を渡そうか悩んでいたら、焼きたてが近くのお店に並んでたんだよ」
「そっかあ……うん、凄く美味しそう。もう一つは……アクセサリーと、香水」
楓が渡した紙袋から取り出されたのは、栄依子の瞳と同じ翠の小さな星の形の宝石が嵌め込まれたブレスレットと、香水の小瓶だった。
「この香水、どんな香りの香水なの？」
「――――」
「楓くん？」
「――えー、っと。んん……その……」
目を逸らし、気恥ずかしそうにすると、栄依子に顔を向けてぽつりと呟く。
「メイプルシロップに近い、匂いだったので、これが良いなと直感しました」
「……。――っ、ぁ……うん」
頬を赤くする楓に釣られて、栄依子も同じかそれ以上に顔を真っ赤にする。
「……ねえ、楓くんは、この3つのお返しの意味って、知ってる？」
「いや、実は知らない。もしかして酷い意味合いだったりした？」
「ううん、違うよ」
ブレスレットと香水仕舞いながらも、しみじみと、感情を染み込ませるように――栄依子は自分が愛されているという事実を噛み締めた。

「……大事にする。ずっと、ずっと」
「――アップルパイは、食べてね？」
「ふふっ、わかってまーす」
そう言って笑う栄依子は、おもむろに楓へと手を伸ばして言った。
「家まで送ってくださらない？　……なんてね」
「もちろん。喜んで」
冗談めかした提案に返しながら、楓はきゅっと優しく栄依子の手を握る。
それから二人で歩き出した楓が――少しして、決心したように栄依子に声を投げ掛けた。
「――栄依子ちゃん」
「……なあに？」
「君が好きだ」
あっけらかんとした言葉。しかして楓の隣で顔を見上げた栄依子は――彼の手を強く握り、より深く寄り添いながら返すのだった。
「――私も、貴方が好きです」

セサミ　①

　エトワリアに存在する、言の葉の樹の上部に位置する神殿。そこに度々訪れることがある楓は、とある悩みを抱えていた。
「――あら、楓さん。こんにちは」
「……こんにちは、セサミ」
　書類の束を手に現れた女性――七賢者が一人にして、筆頭神官アルシーヴの専属秘書であるセサミが、楓の存在に気づくと近付いてくる。
「本日はどういったご用件で？」
「ああ……ほら、よくきららちゃんが里の近況をアルシーヴと話し合ってるでしょ？　でも本人が別件で居ないときは、俺が代わりに来るようにって約束してて」
「そうでしたか。では、私も書類を届けに行く予定なのでご一緒にどうですか」
「それは、是非」
　楓が了承すると、セサミの片眼鏡（モノクル）を付けた顔が柔らかく緩む。
　隣り合ってアルシーヴの元へと向かう傍ら、歩きながらセサミが口を開く。
「――この間、シュガーとカルダモンに絡まれていたような気がしますが」

「んー、キッチンを借りて痛み始めてた材料でお菓子を作った時のやつかな。絡まれていたというか……あれもう半分カツアゲだったよ、作ったお菓子７割くらい二人に持ってかれたし」

目敏く匂いを嗅ぎ付けたシュガーと、仕事帰りで暇を持て余していたカルダモンにキッチンから出ると同時に捕まった当時の思い出を想起して渋い顔を作る楓に、セサミは労うように言う。

「……大変でしたね。というか、なぜ神殿のキッチンに通されたのですか……？」

「え？　えー……あー」

楓は顎に指を当てて悩むそぶりを見せると、自分でもよくわかっていないかのように返した。

「たまに料理を手伝ったりしてるんだよ。なんか知らないけど顔パスになってる」

「なるほど……ん、もしや食堂で配られていたチーズケーキは貴方が――」

「たぶんそうかも？　マカロンとクッキーは二人に全部食べられたから、チーズケーキが残ってたならおそらく俺のやつだ」

「そうでしたか。誰が作ったか聞きそびれてきましたが、とても美味しかったですよ」

「そりゃよかった」

そんな風に会話を交わしながら歩くと、アルシーヴの使っている神官用の仕事部屋に

たどり着く。ふぅと一息ついた楓を見るセサミは、バチリと視線がかち合って、不思議そうに小首を傾げる彼に対して小さく笑みを浮かべる。

「どうかした？」

「――貴方と話をしていると、よく目が合うので。それがなんだか……悪くないな、と」

「……。なんでだろうね」

すっ、と視線を斜めに逸らして楓はすっとぼける。セサミは青い髪を伸ばし、黒いローブを羽織っているが――肝心の衣服は、水着どころか下着よりも面積の少ない際どい格好であった。

なによりも問題なのは、秘書の正装として本人がもはや水着ですらない布を嬉々として身に纏っているところにあった。

一応は健全な精神の青年である楓にとって、顔を見るというのは、自衛の一環なのである。

「――アルシーヴ様、セサミです。それと、きららさんの代わりに楓さんが来ております」

「……はぁ……」

扉にノックをするセサミの背を見ながら、楓は重いため息をついていた。

元の世界では感じたことのない、未知の感情に振り回されている自覚をしながら。

「――なるほど、つまりお前はセサミがスケベ過ぎて困っている……と」
「もう少しオブラートに包んでくれるか」
「だいぶ包んだけど……？」
「嘘でしょ」
　カチャ、とティーカップを皿に置いて、犬井燎原は楓に対してそう言った。
　神殿から帰る途中、ふもとの街で出くわした燎原と共に喫茶店で一服することにした楓は、注文したブラックコーヒーを呷ってから呟く。
「燎原はセサミに会ったことあるか？」
「何度か。あれは確かに、刺激が強い」
「刺激というか劇薬というか……本人は誇りある秘書の正装としてあの格好をしてるから、なおさら指摘しづらくてなあ」
「まあ……『あんたの格好見てられないから着替えてくれ』なんて言いづらいだろう」
　――加えて、男が言うのもな。と続けると、燎原は飲んでいた紅茶に砂糖を追加してティースプーンでかき混ぜる。すると、不意に燎原は思い付いたように声を漏らした。
「あっ、そうだ」

「じゃあ俺帰るから」
「おい、待てい」
「……ギギギギギ……！」
「瀕死の虫みたいな声を出すな。俺の素晴らしい作戦を聞いてから帰れ」
踵を返して帰ろうとする、苦虫を噛み潰したような表情を取る楓を、燎原は座らせ直す。それから紅茶を一口飲むと、一拍置いて続けた。
「楓、セサミとデートしてこい」
「ちょっとよく聞こえなかった」
「聞こえない振りをする度に要求を過激にして行くぞ。ＡＢＣどころかＺまでやらせる」
さらりと恐ろしいことを言い放つ燎原に頬をひくつかせて、とりあえずと話を聞く姿勢を取る。咳払いをしてから、楓は逆に問いかけた。
「……で、その心は」
「今後セサミと会うときにマトモな格好をしていて欲しいなら、お前からプレゼントとして送ってやれば良い。服装はともかく常識はあるんだ、仕事で着るのは無理でも、私用でお前と会うときは着てくれるさ。無下にはされまい」
楓は思っていたよりも真っ当な理由だったことに安心しつつ、先の言葉に疑問を浮か

べる。
「それと『デート』にどういう繋がりが……」
「お前がセサミのことを好きだからだが？」
「……？？？？？」
「おい、なんでそこで首をかしげる」
突如として言われた言葉に、楓は心底不思議そうな表情をした。燎原もまた面倒くさそうにため息をついて、諦めたように返す。
「まあいい。その辺は自分で気づいてもらわないと意味がないからな」
「はあ……」
「今日のところは俺が奢ってやる。お前は近いうちにセサミを買い物に誘ってこい」
「燎原、お前が奢るときは『それだけの価値がある』ときだけだ。もしかして俺で遊ぶのが楽しいとか思ってるんじゃないか？」
楓にそう言われた燎原は、伝票を片手に、斜めを見上げてから間を開けて言った。
「そんなことは……ないぞ」
「せめて断言して？」

――後日の週末、街の一角にある服屋の近くで待ち合わせをしていた楓は、ぱたぱたと駆け寄ってくるセサミを視界に納める。
「こんにちは、セサ……ミ……」
「お待たせしてすみません」
「ああ、まあ、うん」
楓は伊達眼鏡を避けるように顔を手で覆いながら、秘書の正装でやってきたセサミの顔を見て小声で問いかけた。
「オフだから私服で来てって言ったよね？」
「……これはですね、アルシーヴ様からお休みを賜ったのは良いのですが、今日が仕事ではないことに……仕事着に着替えて外に出た辺りでようやく気づきまして」
「そっかあ」
――じゃあ仕方ないか。と続けて、楓は視線を背後の服屋に向ける。
「ところで楓さん、なぜ私の私服を見繕う話になっているのでしょうか」
「え。――――あぁ……」
セサミのごもっともな言葉に、楓は返しに詰まる。燎原の『デートに誘え』という指示通りとはいえ、デートとは言わず買い物にと誘ったはいいが、その理由までは考えていなかった。

一拍言葉を遅らせて、下手な誤魔化しは不味いと思案した楓は直球で答える。
「セサミに……似合う服を……送りたくて？」
「――――。そう、ですか」
ふい、と顔を逸らして、セサミは服屋に入って行く。この場に燎原が入れば小躍りでも始めただろう展開に向かいつつある楓は、続けて店内へと入る。来客に反応して近付いてきた店員の女性が、朗らかに話しかけてきた。
「いらっしゃいませ……あらお客様、カップルでのご来店ですか？」
「は――いえ、そういうわけでは」
「あーうんうんそうですそうです」
「はい？」
「ごゆっくりー」
店員の唐突な問いに一瞬頭が白くなるセサミと、雑な返しで肯定する楓。
セサミの腕を引いて店の奥に向かう楓に、彼女は困惑しながら質問する。
「先程のはいったい……」
「あの店員さん、俺がたまに召喚されてすぐのクリエメイトを案内がてら連れてくると、毎回『恋人ですか？』とか聞いてくるんだよ」
「そ、そうだったんですか」

やれやれとかぶりを振って、楓は店内を見渡す。楓の試練は、ここからだった。
「しかし、服を送るとは言ったけど――」
「楓さん？」
「先に言っておくと、俺にファッションセンスなんてものはない」
「……なるほど」
――ではなぜ自分から服の話を……というセサミの言葉はなんとか飲み下された。
「……自信がないのなら、私も手伝いますよ」
「それは……うん、とても助かる」
「ですが、最後は、貴方が選んでくださいね」
「――――、うぃ」
すっ、と顔を近づけて、セサミは楓にそう言って笑いかける。それから二人は女性モノの衣服をあれやこれやと試しては、セサミが試着室を出入りした。なぜか店内の端にあるコスプレ衣装からは目を逸らしつつ、冬に合う暖かな服を探す。
「……なんというか、もうこれで良いんじゃないかと思えてきた」
「ふむ……そうですね、悪くないかと」
シャッ、とカーテンを開けて出てくるセサミ。彼女は寒い時期にちょうど良いニット

のセーターを羽織り、下にはロングスカート。そして頭には、ちょこんとベレー帽が乗っていた。

邪魔になるローブを預かり、畳んで腕に掛けている楓は、気恥ずかしそうに朱色の頬を緩めるセサミの顔を見て何も答えられないでいる。

「――うぉぉ、あー……えー……」

「あの、楓さん。どうでしょうか」

「……ああ、セサミ。すごく似合ってるよ」

「ふふっ、ありがとうございます」

恥ずかしそうにしながらも、本心を隠さない称賛にセサミは頬をより赤くする。それを見て、楓は自分の顔が熱くなっている感覚を覚える。自身の好みど真ん中の格好をさせていることに気付き、そこで、ようやく――

「――マジか。ああ、そうかあ、そうか。なるほど」

「楓さん？」

「……うんにゃ、なんでもない。その服、買ってそのまま着ていっちゃおうか」

「そうしましょうか」

ローブを受け取りながら答えるセサミを見て、楓は懐から財布を取り出して呼び掛ける。

「――すいません、店員さーん」
「はーい、ごちそうさまでーす」
「なにが???」
呼ばれた女性店員の顔は、妙な満足感に包まれた、大層幸せそうな笑顔であった。

――セサミを送り届けようと帰路を歩く楓は、いまだ消えない顔の熱に茹だるような感覚を味わいため息をつく。夕暮れの肌寒い空気が、今は幸運にも心地よかった。
「――楓さん、私の仕事着があまり好きではないのですよね」
「え゛っ」
「……なんとなくそう思っておりました。少しばかり、あの正装は肌が出ていますから」
「少し……？」
楓の疑問符には気づかないまま、商品の代わりにローブを入れた紙袋をさらに続ける。
「ですが――こうして貴方と買い物が出来るなら、悪くなかったのかもしれません」
「……セサミ」
「アレは秘書の正装ですので、この服はそうそう使えませんが――」

自宅に続く分かれ道の真ん中に立ち、振り返ったセサミは、目元にかかる髪を指で掻き分けて、楓の顔を真っ直ぐ見つめて笑った。

「――貴方と個人的にお会いしたいときは、この服を着て参りますので」

「――――」

「では楓さん、また近いうちに、神殿で」

真面目な性格とは裏腹なイタズラっぽい笑みを浮かべて、セサミはそう言って背を向けて歩き去る。残された楓は、うおおと呻くように呟いて空を見上げた。

「……これは、また燎原にからかわれるな」

セサミ　②

「――楓さん、私と結婚しませんか」
「スタート直後にゴールするのはルール違反だと思うんだが」
「……？」
「『順を追って話せ』ってことだと思う」
「ああ、なるほど」
　街のカフェに呼ばれた楓と燎原。眼前のセサミにそう返した呆れ気味の燎原の言葉に首をかしげる彼女は、楓の翻訳に納得して続ける。
「実はここ数年……この時期になると、街では結婚式ブームが訪れるのです」
「はあ。それはまたどうして」
「……ジューンブライドか」
「なにそれ？」
　そう呟いてコーヒーを音もなく啜る燎原が、ため息をつきながら言った。
「日本人のクセ（クリエイト）になんで知らないんだ……簡単に言えば『6月に結婚した花嫁は一生幸せになれる』という言い伝えだな。おそらく聖典経由で広まったのだろう」

「はぇー。――セサミ？」
「はい？」
「なんでそれが俺と君の結婚話になるんだ？」
　そもそもの疑問点に振り返って、楓は眼前で紅茶を飲むセサミに問いかける。
「……今回のイベントには七賢者にも参加してほしいという話だったのですが、ちょうど時間に余裕のある者が私しかおらず……」
「で、花嫁役をやることになったから、その相手を楓にしてもらいたかったのか」
「はい」
「ふ――――ん？」
「なんだよ」
　あっけらかんと言ったセサミから楓に視線を移して、そう鼻を鳴らしながら口角を吊り上げる燎原は心底楽しそうに返した。
「いや別に。それで？　折角のお誘いな訳だが……当然受けるんだろう？」
「……うーん、どうしよう〝っ」
「当然、受けるんだろう？」
「小突かなう〝っ、脇腹う〝っ」
「当然、受けるんだろう？」

「お前了承するまでどつく気かう〝っ」
「当然、受けるんだろう？」
手刀の指先を脇腹に突き刺す燎原のシンプルな暴力を前に、楓はうめき声を上げながらも抗議する。――仲良いですね、と、セサミは二人のじゃれ合いを見ながらそんなことを考えていた。
「鈍感太郎がよ……俺も居るのにお前が誘われた事実をよく考えてから喋るんだな」
「……？　燎原さんも参加したかったのですか」
「そういうわけじゃ――――、そうだな。枠が余ってるなら参加したいのだが」
「もう嫌な予感してきた」
セサミの問いに一度は否定するが、燎原は一拍置いてから手のひらを返す。
明らかに何かを企んでいる顔を見て、楓はコーヒーを飲みながらげんなりとしていた。

――後日、舞台となる式場の前に集まった楓と燎原は、セサミと共に神殿から派遣されてきたスタッフの案内で中を歩いていた。
「……どうせ来るなら他に誰か誘えばよかったのに。珠輝ちゃんとか、乃々ちゃんとか」

「たまと乃々は水葉と鶴瀬を連れて背景素材のフィールドワーク、先輩たちは部屋で作業、照は……誘ったけど来なかったのを見るにバックレたな。まあ来たら来たで、恐らく昼に食べたものを戻してただろうから別に良いが」

しれっとそう言いきった燎原に、楓は困惑の色を強めて問い返す。

「どうして……」

「アイツは『結婚』とか『夫婦』が特大の地雷だからな。ここに来たら蒸発しかねん」

「吸血鬼かなにか？」

「似たようなものだ」

はえー……と呟く楓が、通された控え室で自分用のタキシードを見ると続ける。

「まさかこういう服を着る機会が訪れるとは」

「お前なら元の世界にも、相手の一人や二人や三人や四人いるだろう」

「居すぎ居すぎ。というか燎原に限っては人のこと言えないでしょ」

「どうだかな」

早速と扉が閉まるのを確認してから着替え始める楓に、燎原は逡巡してから話を切り出す。

「――楓、お前は先日、なぜ誘いを渋った？　あくまでも『ごっこ』とはいえ、あのセサミと結婚するのが嫌なわけではあるまい」

「……それはそうなんだけど……うーん、なんというか、『俺で良いのだろうか』って思っちゃって、乗り気になれなくてさ」
「そうか。ここまで来たからには腹を括れ」
「辛辣すぎない？」
「はっはっは、自業自得だ」
——襟立ってるぞ。と続けて言われ、楓はそれを直しながら微妙そうな表情を取る。
楓の妙な自信の無さに違和感を覚える燎原は、タキシードを着こんだ楓を見て、微笑を浮かべながら言った。
「馬子にも衣装だな」
「それは自分が一番分かってるよ」
「——楓様、そろそろ会場へ」
「あ、はーい」
コンコン、とノックされて、扉の向こうから神殿のスタッフが声をかけてきる。それに対応すると、楓は廊下に出て会場へと向かう。その背中を見ながら、燎原はそっと懐からＳＮＳ部メンバーで度々使っている録画装置を起動していた。

――楓がその後ろ姿を見たとき、あまりの眩しさに一瞬目眩を覚えたほどだった。
振り返ったセサミは純白の衣装に身を包み、頬を朱に染めて、遠慮がちに楓に問いかける。
「……どう、でしょうか」
「――――」
僅かに目を見開いた楓から返答が来ないことに小首を傾げるセサミだが、小さく頭を振った楓は改まっておずおずと口を開く。
「……綺麗、です。すごく」
「そうですか。……ふふ」
世辞ではないとわかる言葉にセサミは満足げに目尻を緩める。それから神父を待つまでの間に、彼女はおもむろに楓に言った。
「楓さん、ご無理をされてはいませんか」
「そんなことは――いえ、すいませんわりと精神的にキてます」
「……申し訳ありませんでした」
「はい？」
「これは、私のワガママだったんです」
そう言ったセサミは、疑問符を浮かべる楓にもわかるように説明する。

「――時間に余裕のある者が私しかいなかった、というのは、嘘です。本当は……私がこのイベントに参加したかっただけなのです」
「……それはまた、どうして」
　楓の問いに、セサミは困ったように視線を右往左往させ、諦めたように朱色の頬をより赤くして、半ばやけくそ気味に返した。
「……ふと、貴方の顔がよぎったから」
「え」
「私とて女です、いつか誰かと所帯を持つことがあるかもしれない――そう考えたとき、隣に居るのは誰なのだろうかと考えました」
「……」
「隣に居る――いえ、居て欲しい相手。それが貴方でした、だからお誘いしたのです」
「――あ、う、おぉ……?」
　ぼっ、と顔が熱くなる感覚を覚えて、楓は咄嗟に席に座っている燎原を見る。
　――その顔は、今まで見たこともないような、お手本のような笑顔だった。
「グッドラック」
「こ、こいつ……!!」
　一発水魔法でも浴びせてやろうかという思考が過った楓だが、やって来た神父を見

て、今回のイベントのクライマックスである結婚式『ごっこ』の始まりを理解してセサミと向き直る。

　燎原の他にも村や街から見学にきた人たちや、特別仲が良いわけではないが顔見知りではあるクリエメイトの少女、録画装置の水晶を構える燎原に見守られながら、二人は式を進める。

　そして最後の締めで、問題は起きた。

「――では、誓いの口づけを」

「えっそこまでやるんですか」

「はい。そこまでする必要はないかと思われたのですが、そちらのクリエメイトの男性いわく、口づけまでやるのが正しい作法だと」

「燎原!!」

「ドラマチックに頼むぞー」

　あっけらかんと言い放ちながら録画装置を構える燎原。やはり一発……と考えた楓だが、その思考を頬を押さえる両手に遮られる。

「あの、セサミ?」

「楓さん、作法なら仕方ありません。覚悟を決めましょう。私は決めました」

「セサミ？　ちょっ力強い……！　――セサミ、セサミ？　これあくまで『イベント』だからね？　本当にする必要は無いからね？」

「――――」

「話聞いて？」

ぐぐぐ……と顔を近づけてくるセサミを前に、思いの外力が強いことに驚きつつ、楓は――顔を赤くしたままの彼女と目を合わせる。

思わず瞳の色に文字通り目を奪われ、楓はするりと抵抗する力を緩めた。

「……燎原、末代まで恨むぞ……」

――その後どうなったのかは、式場の者達のみぞ知る。だが、燎原の持っていた録画装置が木っ端微塵に破壊されたのは言うまでもない。

リアリスト　①

「――ただいま～っと……またか」

街から離れたとある施設に、荷物を詰めた買い物袋を肩に提げて玄関から入ってきた楓。

ふと、奥のリビングから聞こえてきた怒号にげんなりとした表情を浮かべて、楓は荷物を背負い直してから声の方向に向かった。

「……ヒナゲシー、今日は誰と誰だ？」

「あっ、おとうさんお帰り。今日は……お姉様とスイセンなの」

「先週はスズランとエニシダだったな」

オレンジがベースの服を着た、おどおどした少女に問いかけると、少女――ヒナゲシはそう言って視線をテーブルを挟んだ向かいに向ける。

荷物を起きながらその方向に顔を向けるとそこでは、西部劇のガンマンのような服装をした黄緑の髪の少女と、マントを羽織った際どい格好のピンク髪の少女が言い争っていた。

今にも掴み合いに発展しそうな剣幕の二人に、楓はため息混じりに介入する。
「こらこらこら。スイセン、リコリス、今度はどんなしょうもない理由で喧嘩してるんだ」
「しょうもなくない！　楓、聞いてよ！　リコリスがウチのクッキー勝手に食べた！」
「だーかーらー、そんなの名前書いとかないあんたが悪いでしょ？」
「なにおう!?」
――しょうもないじゃないか。と反射的に言いそうになった口を閉じて、楓は一拍置いてから呆れながら改めて口を開く。
「それで、俺がちょっと街に買い出しに行った一時間でどうやったら喧嘩出来るんだ？」
ガンマンとマントの少女――スイセンとリコリスは、楓にそう言われて冷静さを取り戻す。
「……アタシがちょっと口寂しくて、なにかないかと思って冷蔵庫漁ってたのよ。で、クッキーあったからこれでいいかって思ったの」
「それがスイセンのものだとは思わなかったから喧嘩になったのか」
「ふん。名前書いとけって話でしょ」
「食う前に聞けって話だろ」
「いたっ」

ビシッ、と鋭い手刀がリコリスの頭に落ちる。頭を押さえる彼女に、楓は続けた。
「ほら、スイセンに謝りな」
「……」
「今日の晩御飯の当番はエニシダ――――」
「スイセン、悪かったわよ」
「……仕方ないから許す。ウチは寛大なんよ」
一転、先程までの態度は何処へやら。
リコリスは手短だが本心の謝罪をし、スイセンもあっさりと彼女を許した。突然名前が挙がったエニシダは、紅茶を淹れていたカップを置きながら疑問符を浮かべて小首を傾げた。
「なぜワタクシを引き合いに出すんですの？」
「お前の料理が不味いからだろ」
「ワタクシ別に下手ではありませんが!?」
テーブルを挟んだ向かいで楓たちの会話を聞いていた、ホットパンツとボロボロのビキニを着た女性――スズラン。彼女にそう言われて、角の生えた頭をぐりんと向けてエニシダは返す。
それからエニシダは楓を見ると、うがーっと威嚇するように声を荒らげた。

「ちょっと楓さん、あなたワタクシの料理にケチをつけるおつもりですか？」
「いや、旨いよ？　でもキミ鼻歌歌いながら料理するでしょ。魔力が料理に混ざるせいで、食べながら気分が落ち込んで行くんだよね」
「……そ、そうでしたか」
　……そうでしたか？　と疑問符を浮かべるエニシダだが、無意識にやっていては気づけまい。彼女の歌は人の感情を落ち込ませる呪いが込められてしまうため、迂闊に人前で歌えないのだ。

「――さて、それはそれとして、今日のおやつはパウンドケーキを作りまーす」
　パン、と手を叩いて注目させると、楓はそう言いながら買い物袋を持ち上げてキッチンに向かう。一拍置いてひょこりと顔をリビングに覗かせると続けて言った。
「作るの手伝ってくれたら、分けるとき大きめに切ってあげるぞー」
「やるの」
「やるっ！」
　楓の言葉に、ヒナゲシとスイセンが反応してキッチンへと追いかけていった。
　その背中を見送ったリコリスはエニシダとスズランと同じように座ると、薄く笑みを浮かべて呆れ気味に口を開くと呟いた。

「……ふっ、食い意地張ってるんだから」
「食い意地の半分は貴女がクッキー食べたせいですわよ、リコリス」
「わかってるっての」
　テーブルに肘を突いてそう返すリコリスに、エニシダはくつくつと喉を鳴らして笑う。
　キッチンの奥から聞こえてくる調理の音と材料の香りを感じ取りながら、スズランが「しっかし――」と呟いてから続けた。
「楓……アイツって確か神殿所属のクリエメイトだろ？　よくオレらみたいなはみ出し者の相手なんか出来るよなぁ」
「それだけ変わり者ってことなんじゃないの。この世界の住人じゃないんだから、聖典嫌いがどれだけ厄介な話かなんて知らないんでしょ」
　ふん、と鼻を鳴らすリコリスは自虐的な笑みを作る。彼女らが暮らしている孤児院、『リアリスト』。ここは聖典を嫌う者、行く宛のない者、社会からあぶれた者、そういったはみ出し者を集めて保護する、一種の避難所であった。

――カチャカチャとフォークと食器のぶつかる音が響き、辺りにはバターの香りが漂

う。

エニシダが用意した紅茶とマッチしているそれを口に入れる楓に、半分だけ残したケーキをスイセンに譲りながらリコリスが問いかけた。

「楓、あんたって普段神殿で何してるの？」

「ん？　言ってなかったっけ」

「少なくともアタシは聞いたことないわよ」

うーん、と悩む動きを見せる楓は、少しして困ったように口を開く。

「いわゆる窓際部署って感じだからなぁ。要は……神殿版の何でも屋？」

「あー、なんか分かる。お前そういうのやってそうな顔してるもんな」

「どんな顔だよ……」

カラカラと笑うスズランに苦い表情を返す楓。

「というかここに居るのも仕事の一環なんだぞ？　アルシーヴからは『聖典を不審がる者たちの監視をしろ』って言われてるんだからな」

「――ふーん」

「……まあ、定期的な報告では『特に問題ありません』としか言ってないけどね」

「それ職務怠慢って言わねぇ？」

リコリスの表情が冷めるが、続けて言われた言葉にスズランが苦笑をこぼした。

「そりゃ、俺は好きでここに居るんだからな。アルシーヴの言い分は尤もだけど、お前たちが何かやらかすとは思えないし」
「あんたアタシたちのこと好きすぎじゃない？」
「そうだね」
「……」
「自爆しましたわね」
　嫌みのようにからかい半分で言ったリコリスは、あっけらかんとした返しに頬杖をついたままの姿勢で頬を染め、エニシダが呟く。
　それから少しして、玄関の方から誰かが入ってくる音を耳にした。
「……お、二人とも帰ってきたか」
「――ただいま、戻ったよ」
「戻りました」
　玄関からリビングへとやって来たのは、頭に角のある骸骨を被ったふくらはぎ辺りまである黒髪を真っ直ぐ伸ばした女性と、黒と白で半分ずつ分かれた髪を伸ばしている少女だった。
「いい香りだ、おやつの時間だったのかい？」
「お帰りハイプリス、サンストーン。二人の分も出すから座っててくれ」

「そうか、ありがとう」
「……お構い無く」
「はいはい」
　どことなく気まずそうな少女――サンストーンに適当に返した楓は、自分の食器を下げるついでに、二人の分で分けておいたケーキを取りに行った。席についたハイプリスは、自分の横に腰を下ろすサンストーンに楽しげに言う。
「まだ楓が苦手かい？」
「……いえ、そういうわけでは」
「ふふ、初対面の頃に強く当たったことなら、もう気にしていないと思うけれどね」
「……お戯れを」
　当時のことを思い返して笑みを浮かべるハイプリスに、サンストーンはそう返した。
「――ところで、お前たち」
「は、はい」
　ふと、おもむろにハイプリスはリコリスたちを見回して、全員を見ると問いかける。
「楓に迷惑は掛けていないかい？」
「それは……まあ」
「ちゃんといい子にしていた？」

「と、当然じゃんっ！」
リコリスとスイセンが反射的にそう言うが、ハイプリスにじっと目を見られて冷や汗を垂らす。横で顔を逸らして笑うスズランに一瞬イラッとしつつ、二人はハイプリスの言葉を待った。
「……なら、そう言うことにしておこうか」
「――――」
「――――」
「今後は、気を付けるように。いいね？」
にっこりとした笑みを浮かべつつも目は笑っていないハイプリスに、二人はただただ小さく「はい」と答えるしかない。
施設『リアリスト』の管理者、ある種の院長のような立ち位置のハイプリスに逆らえる者は、おそらく楓以外に居ないのだろう。

――少女らが寝静まった深夜、パチパチと木が弾ける音を聞きながらぼんやりとソファに座って暖炉の火を眺めるハイプリスは、横に座った楓に意識を向ける。
「ココア飲むか」

「ん、ありがとう楓」
　差し出されたマグカップを受け取ると、彼女は表情を緩める。湯気の立つそれに息を吹き掛けてから一口啜ると、楓に言った。
「あの子たちの相手は疲れるだろう」
「そうだなぁ……まあ、お世話には慣れてるからなあ。クセの強い子にも慣れてるし」
「ふふ、頼もしいね」
「それよりお前こそ、これでよかったのか？　女神候補生が聖典嫌いを集めて保護しようなんて」
　楓の言葉に、ハイプリスは視線を暖炉に移しながら、カップを傍らの机に置いてから返す。
「――例えば、聖典は人に希望を与え、笑顔にする力があるのだろう。だとしたら、聖典があるからといって笑顔になれない程に生きることが難しい者たちは……どうすれば救われる？」
「だから、女神候補生を辞めて神殿を抜けてでもあの子たちに居場所を作りたかった……と。ハイプリス、俺の監視対象はそんな行動に出たお前でもあるって、わかってるんだよな？」
　――わかっているよ。そう言って、ハイプリスは楓の方に向いて続けた。

「そうしなければ、家族から愛を与えられなかった者は、孤独を恐れる者は、呪いのせいで夢を諦めざるを得なかった者は、どうなっていたのだろうか。そう考えてしまうとね――私は自分の行いを悔いることは出来ないんだ」

「……まあ、そうだな。もしかしたら悪いこととか企てそうだし、ハイプリスの行動は……間違いではないんだろうよ」

――だからこそ、楓はリコリスたちが危うい精神をした不安的な少女たちだと分かっていながら、神殿には『問題なし』と報告している。

それはもはや立派な裏切りと言える以上、楓にハイプリスを咎める権利はない。

「……はぁ。仕方ないか」

マグカップの残りを呷って、ため息をつきながら立ち上がると、楓はハイプリスの頭にある魔物の頭蓋骨を取りながら彼女に言った。

「――それはそれとして、お前……なんでこんなもん被ってるんだ？」

「ああ、いいだろう？　私の顔を知っている者はそれなりに居るからね、変装も兼ねているんだ。カッコいいと思うんだが……どうかな」

「……めちゃくちゃ悪役っぽい。お前の格好ってこう、悪の組織でリーダーやってそうだよな」

「え、っ」

頭蓋骨を元の位置に戻してそう言った楓に、ハイプリスがどことなくショックを受けているような顔をする。楓はそんなに気に入ってたのか――と呟くと、その場をあとにするのだった。

猿渡宇希　①

「そろそろ七夕の季節だな」
「はい」
「はいじゃなくてな」
　元の世界の部室をモデルにした部屋で並んで座り、新作のゲームで対戦をしていた楓と燎原。ピコ、とコントローラーを押して画面を止めると、燎原は背もたれに体を預けながら続けた。
「エトワリアでは特定の時期になると、聖典が元ネタの行事をクリエメイトにやらせる傾向にある。そして今年もその季節になったわけだ」
「なるほど」
「それで、どうやら前回は女子だけで七夕伝説をやったらしいが、今回は男も居るから俺たちに参加してほしいのだそうだ」
　説明を終えて画面を再開する燎原に、ふと気になったことを楓が聞く。
「……？　ひでりちゃんも居たよね？」
「ヤツは織姫側を選ぼうとしたから縄で縛ってスティーレに置いてきた。今回の七夕伝

説には付いてこれそうにない」
「えぇ……」
「前回は女子だけだったから今回は男だけでやろうなんて言ってみろ、俺たち全員が次の同人誌イベントのモデルにされるぞ」
同人誌……？　と疑問符を浮かべる楓は、そういえばと更に聞き返した。
「七夕伝説ってどういう話なんだっけ。織姫と彦星が一年に一回しか会えないやつ……っていうイメージしかないなぁ」
「ああ、めちゃくちゃザックリ言うと、『恋愛に現を抜かしたバカップルが仕事をほっぽってイチャついたせいで織姫の父親の怒りを買った』という話だな。一年に一回しか会えなくなったのはそのせいだから自業自得と言える」
「これそのままの話をやったらこっちの子供の夢ぶっ壊れない？」
要点しか話していないが殆ど合ってはいる内容に、楓は引き気味で言う。
燎原は横目でちらりと楓を見て、ゲーム内のキャラにとどめを刺してから続ける。
「――あ、」
「俺の勝ち。……まあ今のは端折り過ぎたな。厳密には彦星は真面目に働きすぎる織姫の幸せの為に父である天帝が連れてきた伴侶で、牛追いの仕事をしていた人間だ。
しかし結婚を境に怠けて遊んでばかりな織姫は機織りの仕事を、彦星は牛追いの仕事

をしなくなり、着物は作られず牛は痩せ細り病気に。
そんな堕落ぶりに怒った天帝は二人を天の川を挟んで互いの姿を見えないくらいに引き離したわけだ。だが織姫はそのことで悲しんで泣いてばかりで仕事もできない。
流石の天帝も不憫に思ったのか、『真面目に働くなら年に一度だけ彦星に会わせてやる』としたそうだ。その日が7月7日なのだとか」
長々と話終えて、燎原は茶を啜り喉を潤す。
「ちなみに夏の大三角形のベガとアルタイルは織姫と彦星だったりする。この辺の話は木ノ幡か真中にでも聞けばいいだろう」
「へぇ～」
「ちなみに今の話を聞いてどう思った？」
「……天帝がめちゃくちゃ親バカ？」
ふうん、と鼻を鳴らして、燎原は後ろの机に向き合って絵を描いていた水葉に目を向ける。
「お前は？」
「ん？　……そうね、『働きすぎる織姫に最終的に真面目に働くようにと約束させる』のは本末転倒なんじゃないかしら？　とはいっても、結婚した途端に怠けるのも嫌にリアルよね」

「うーん、やっぱりこれ完全再現しても子供にはつまらないんじゃないかな」
「やはりある程度は改編する必要があるか。まあ、所詮は二次創作だ、都合よくハッピーエンドにしても問題はあるまい」
　ゲームを閉じた燎原が立ち上がると、ゴキゴキと関節を鳴らしてから言った。
「じゃ、織姫役に会いに行くか」
「なんて？」
「お前にもキビキビ働いてもらうぞ彦星役」
「なんて？」
「……？」
「いや『何言ってんの？』みたいな顔は俺がしたいんだよ。なんで自分でやらないのさ？」
「それは、楓にそういう役目をやらせると面白いことを、理解しているからです」
「なんて最悪な思考回路なんだ……」
　後ろに回った燎原は楓の肩をがしりと掴むと、一拍置いて続ける。
「ちなみに織姫役のクリエメイトには既にある程度話を通して衣装も作らせているからな。これで断るお前ではあるまい」
「どうしてそこまで用意周到に俺を困らせることに関してだけ余念がないんだ……」

「彦星役をやってくれるだろうか。やってくれるね。ありがとうグッド七夕伝説」
「お前のその突然会話が通じなくなるの、ものすごい怖いんだけど」

——飯野水葉から同情的な目を向けられながら部屋を出て暫く、くだんの織姫役が居るらしい場所に向かった楓は、横に立つ燎原に恨みのこもった顔と言葉を向ける。
「あのさあ」
「はい」
「はいじゃなくてね……まったく」
しれっとした顔で視線を受け流す燎原だが、楓は意識を切り替えてため息をついてから、道中で買ってきた菓子折りを手渡した。
「突然ごめんね宇希ちゃん、燎原の奇行に巻き込まれて大変だったでしょ」
「い、いやあ、気にすんなって。私もまあ……相手がお前なら……その……別に……嫌じゃないっつーかなんつーか」
「ん？」
「……なんでもない」
受け取りながらもごもごと言葉尻を小さくさせる少女——猿渡宇希は、それで、と続

けて楓を見上げると問い返す。
「――この格好、どうかな？」
「……。すごく可愛いと思う」
「そ、そうか……あっ、楓の衣装も完成したらしいけど……着てみたら？」
「じゃあ……はい。着ます」
薄紫の衣装の上に透けている羽衣を纏った宇希を見て、楓はそれとなく視線を斜めに上げながら答える。――ちょっと胸元出しすぎじゃない？　と言えるだけの度胸は、流石になかった。

「犬井さん」
「なんだ」
「もしや、秋野さんたちを結ばせるためだけに今回の企画を思い付いたのですか？」
「いやまさか。適任なのが偶然たまたま猿渡とあいつだっただけの話だ」
「本当に？」
「天帝はキューピッドみたいなもんだからな」
「やはり故意でしたか」
二人を遠巻きに眺める燎原の元に、聖典でチアリーダーをしていたグループを纏めて

いる少女――有馬ひづめが現れそんな会話を交わす。
「見てみろ、あの好きなのは目に見えてるのにお互いが一歩引く性格のせいで両片想いに留まっているもどかしい姿を」
「いじらしいですね」
「それに安心しろ、七夕伝説の演劇自体も成功させてみせよう。子供ウケのいいシナリオはうちの部でもよく考えるからな」
「なるほど」
　ひづめは宇希と楓を見ると、互いの織姫・彦星の衣装を見合って顔を赤くしている二人を視界に納めて目尻を緩める。
「あの二人をくっ付けつつ劇も成功させる。難しいが……どうにかなるだろう」
「はい。成功をお祈りしています。なんなら、私達がチアで応援しましょうか」
「……そこまではしなくていい」
　演劇の傍らでチアをするひづめたちを想像して、燎原は顔をしかめながら否定する。それから少しして、ひづめは燎原に問いかけた。
「ところで犬井さん、あなたはどういった役回りを演じることになってるんですか？」
「俺か？　俺は――――」

「――さあこい彦星！　俺はＨＰが５０％を切るとモーションが変わるタイプのボスだぞォ!!」
「七夕伝説ってこんな感じだったっけ?」
「私に聞くな！」
魔法のクリスタルとフラスコを構える彦星（かえで）と織姫（うき）は、槍と盾を握る天帝（りょうげん）と戦いを繰り広げる。子供に受ける演劇にしてやると自信満々に言われてから数日後、七夕当日の夜に開催されたそれで、何故か二人はヒーローショーと化した七夕伝説に巻き込まれていた。
大抵の出来事はエンターテイメントとして受け止めるエトワリアの住人は『まあそういうモノなのだろう』で受け入れ、クリエメイトの面々は『面白いしまあいいか』で誰も止めようとしない。
今この場に、楓と宇希の味方は居なかった。

――激闘の開始から数分、楓の『とっておき』が炸裂し、天帝（りょうげん）は爆発に包まれる。

「ぐっ……俺にはまだ、第二の変身が残され――――ぐわあああああ!!」
そんな断末魔が響き、煙が晴れると、そこに天帝の姿は無かった。子供たちの歓声を聞きながら、二人は息も絶え絶えに口を開く。
「はあ……はあ……つ、強かった……本当に無駄に強くてなんかムカついた……!」
「私たち……なにやってたんだっけ……」
紆余曲折を経てクライマックスに到達した楓たちだったが――ここで、問題が起きた。
「宇希ちゃん、ごめん台詞が頭から飛んだ」
「うえっ!?　……あ、ヤバい私も」
事前に渡されて読み込んだはずの台本の台詞が、綺麗さっぱり記憶から飛んでいた。
――おのれ燎原……!　と、この場に居ない黒幕に恨みをぶつけつつ、向かい合ったきり動かないままでは劇が進まないことを理解して、楓はおもむろに宇希の頬に指を伸ばす。
「っ!?」
「ボロが出る前に、上手いことアドリブでさっさと終わらせてこの場を去ろう」
「そ、それしかないか……どうせ、このあとは彦星が告白して私が受け入れる……だ……け……!?」

自分の口にした言葉に、宇希は顔を赤くする。顎に添えられた指でくっと顔を上げられて、彼女は楓と顔を見合わせた。

「――織姫」

「は、はい……っ」

「……初めて会ったときから、俺は、君のやるべきことに熱意を向けられるところが綺麗だと思った。実は可愛いものが好きなところとか、ちょっと素直じゃないところとか、そういうところを全部ひっくるめてずっと惚れてたよ」

「――え」

真っ直ぐ顔を見ながらそう言った楓の言葉に、宇希の思考は混乱する。それは彦星としての言葉なのか、それとも楓の本心なのか。

「織姫（うきちゃん）、好きだ。俺と結婚しよう」

「……はいっ」

後者だったらいいな、と考えながら、宇希は楓の言葉を受け入れると、観客に見られていることを忘れてそっと顔を近づけるのだった。

「なんで俺は水葉に足を引きずられながら現場から離れてるんだろうな」
「日頃の行いでしょ」